

海外の学校建築

— 国際的動向と先進事例の紹介 —

OECD/CELE 学校施設好事例集第4版において、世界33か国から推薦された166プロジェクトの中から「ふじようちえん」が最も傑出した作品として選出されました。

第1部では、その表彰式と建築家手塚貴晴＋手塚由比氏(2008年日本建築学会賞(作品賞)受賞)から記念講演を行います。

第2部では、学校建築の専門家である OECD/CELE アナリストや長澤悟氏(1991年日本建築学会賞(作品賞)受賞)から学校建築の国際的動向などについて記念講演を行います。



● OECD/CELE (Centre for Effective Learning Environments) とは

教育施設の質を改善し、教育施設を効率的に計画・運営して最大限の教育的効果を引き出すための調査研究や情報交換を行うことなどを目的とした OECDにある一組織です。現在、正会員として13か国、準会員として7か国14団体が参加しており、国立教育政策研究所は準会員として参加しています。

報告書

国立教育政策研究所 編

平成 **23**年 **1**月 **19**日(水)

15:00-18:00 文部科学省第2講堂

主催

表面：学校建築の写真

①

② ③ ① ④ ⑤ ⑥

- | | | |
|--|-------------------------------------|-------------------------------|
| ① Fuji Kindergarten, Tachikawa City, Tokyo, Japan | ○ Architect: Tezuka Architects | ©Katsuhisa Kida/FOTOTECA |
| ② Liceo Tecnico Profesional la Florida, Santiago, Chile | ○ Architect: Marsino Arquitectos | ©Ministry of Education, Chile |
| ③ West-Africa Secondary School, Dano, Burkina Faso | ○ Architect: Diebedo Francis Kere | ©Erik-Jan Ouwerkerk |
| ④ Bertha von Suttner Schule, Schwechat, Austria | ○ Architect: fasch & fuchs | ©Paul Ott fotografiert |
| ⑤ Tecnologico de Iztapalapa, Mexico DF, Mexico | ○ Architect:Taller de Arquitectura | ©Luis Gordo |
| ⑥ School of Art and Art History, University of Iowa, USA | ○ Architect: Steven Holl Architects | ©Christian Richters |

海外の学校建築

—国際的動向と先進事例の紹介—

平成23年1月19日(水)

15:00—18:00 文部科学省第2講堂

目次

I. 挨拶	5
1. 開会		
2. 主催者挨拶		
徳永 保	国立教育政策研究所長	
3. 共催者挨拶		
アラスター ブリス	経済協力開発機構教育局アナリスト	
II. OECD/CELE 学校施設好事例集(第4版)表彰式	11
1. 表彰の趣旨		
アラスター ブリス	経済協力開発機構教育局アナリスト	
2. 学校法人みんなのひろば藤幼稚園表彰 及び 園長先生からのお言葉		
加藤 積一	学校法人みんなのひろば藤幼稚園 ふじようちえん園長	
3. 建築家 手塚貴晴 + 手塚由比氏 表彰		
手塚貴晴 + 手塚由比	手塚建築研究所	
4. 祝辞		
笠 浩史	文部科学大臣政務官	
III. 記念講演	17
1. ふじようちえんの設計をふりかえって		
手塚貴晴 + 手塚由比	手塚建築研究所	手塚貴晴 手塚由比 19
2. 海外における学校施設づくりの動向		
① 未来の学校の姿と機能 —未来の学習環境とは OECD/CELE の取組を通じて—		
ハンナ フォン アレフェルド	経済協力開発機構教育局アナリスト	ハンナ フォン アレフェルド 39
3. 海外における学校施設づくりの動向		
② 海外の先進事例の紹介 —OECD/CELE 学校施設好事例集を通じて—		
アラスター ブリス	経済協力開発機構教育局アナリスト	アラスター ブリス 51
4. 海外の学校建築		
—長年にわたり海外の学校建築を視察してきたなかで—		
長澤 悟	東洋大学理工学部教授	長澤 悟 65
IV. 閉会の挨拶	85
新保 幸一	国立教育政策研究所文教施設研究センター長	

OECD / CELE 学校施設好事例集(第4版)表彰式及び記念講演会
海外の学校建築 - 国際的動向と先進事例の紹介 -
(平成23年1月19日(水) 15:00-18:00 文部科学省第2講堂)



主催者挨拶 徳永 保
国立教育政策研究所長



共催者挨拶 アラスター ブリス
経済協力開発機構教育局アナリスト



表彰 加藤 積一
学校法人みんなのひろば藤幼稚園



園長先生からのお言葉



表彰 手塚 貴晴 + 手塚 由比
手塚建築研究所



祝辞 笠 浩史
文部科学大臣政務官



講 演 手塚貴晴 + 手塚由比
手塚建築研究所



手塚貴晴 + 手塚由比



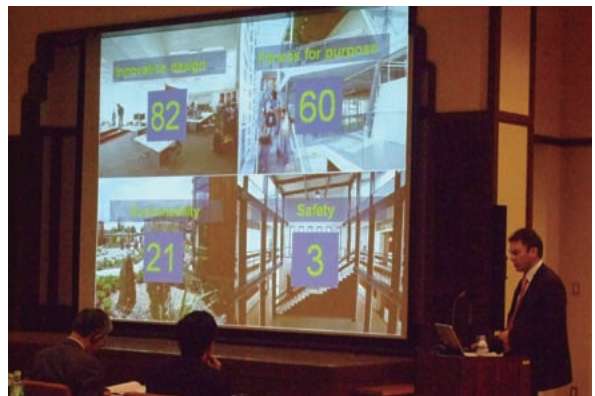
講 演 ハンナ フォン アレフェルド
経済協力開発機構教育局アナリスト



ハンナ フォン アレフェルド



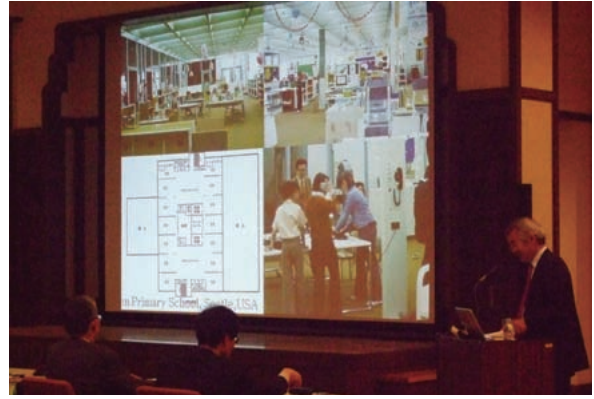
講 演 アラスター ブリス
経済協力開発機構教育局アナリスト



アラスター ブリス



講演 長澤 悟
東洋大学工学部教授



長澤 悟



閉会の挨拶 新保 幸一
国立教育政策研究所文教施設研究センター長



会場の様子



会場の様子



会場の様子

I. 挨 拶

1. 開 会

司会：

皆様、大変お待たせいたしました。ただいまより、OECD / CELE 学校施設好事例集（第4版）表彰式及び記念講演会「海外の学校建築－国際的動向と先進事例の紹介－」を開催させていただきます。

本日は、皆様、御多忙の中をお集まりくださいます、誠にありがとうございます。

本日、司会を務めさせていただきます国立教育政策研究所文教施設研究センターの小林正浩と申します。どうぞよろしく願いいたします。

それでは、最初に、主催者である国立教育政策研究所を代表いたしまして、徳永保所長からご挨拶を申し上げます。

2. 主催者挨拶

徳 永 保 国立教育政策研究所長

ただいま御紹介をいただきました、国立教育政策研究所長の徳永でございます。

まず、皆様方には本日の OECD / CELE の学校施設好事例集に関する表彰式、そして記念講演会にお集まりいただきましてありがとうございます。心からお礼を申し上げたいと思います。

また、本日の表彰式及び記念講演会には、文部科学省の笠大臣政務官、そして長島先生、また同時に、今回、設計をいただきました手塚様御両名の方、そしてまた、OECD / CELE のほうからハンナ フォン アレフェルド氏、また、アラスター ブリス氏等に御参加をいただきましたことにも深くお礼を申し上げます。

私の方からは、きょうの講演会、また、表彰に至る経緯を御紹介申しまして、私の挨拶にかえさせていただきます。

この講演会は、OECD が出版する予定でございます世界の学校建築に関する事例集におきまして、我が国のふじようちえんが高い評価を得たことを記念して、私どもの研究所と OECD が共同して開催をするものでございます。

OECD における教育分野の活動の一つとして、学校建築に関する CELE、効果的学習環境センターという委員会を設けてございますが、この CELE は学校施設の質的改善や教育的効果の向上に関する調査研究、情報交換を行うことを目的として、1972年に創設をされた組織でございます。現在、13カ国が正式に加盟し、準会員が7カ国、14団体が参加をし、私どもの国立教育政策研究所も平成18年からメンバーとなっているわけでございます。

この OECD の CELE でございますけれども、創設50周年の事業の一環といたしまして、世界の先進的な学校建築を紹介するための事例集を出版することとなりました。CELE から各国に掲載候補となる学校の推薦を求めたところ、33か国から166件の応募があったところでございます。これを6名の学校建築専門家で構成されました審査委員会で審査を行ったところ、応募作品の中から28か国60件を好事例集の掲載作品に決定をいたしました。さらにその60件の中から、特に優れた作品として6件が選定されたわけでございます。

我が国からは、立川市にございます「ふじようちえん」、今日いろいろお話があると思いますが、「ふじようちえん」と、横浜市にございます「ゆうゆうのもり幼保園」の2件が好事例集の掲載作品に選ばれることとなりました。中でも、「ふじようちえん」は審査員の得票を最も多く集め、特に優れた作品6件のうち選ばれたわけでございます。

審査結果は10月に開催されました CELE の運営委員会で承認され、さらに11月4日に、笠大臣政務官

も御出席をいただきました OECD 公式教育大臣会合の席上で公表されたわけでございます。その後、CELE から、設置者の学校法人みんなのひろば藤幼稚園様と設計の手塚貴晴様、手塚由比様を表彰したというお話がございまして、本日の表彰式と記念講演会ということになったわけでございます。

今回のプロジェクトを通じまして、私ども日本の国の学校建築というものが、世界各国の建築の中から高い評価をいただいたということを大変嬉しく思っております。このことは、学校教育、そして建築の関係者にとって大変嬉しいニュースでもございますし、私どもの国の学校建築というものを幅広く世界に知らしめる絶好のチャンスであったと思っております。

当研究所におきましても、これからも様々な機会を活用して、我が国の学校建築に関する情報というものを広く国内外に向けて発信させていただきたいと思っております。

記念講演では、先ほど御紹介しました OECD 本部から招聘した2人の専門家に、海外の学校建築に関する最新動向を御披露いただきたいと思いますと思っております。海外の学校建築に関する情報に接する機会は大変少のうございますので、御来場の皆様には十分楽しんでいただける内容であると思っております。

共同主催者でございます OECD / CELE、そして御講演の先生方、そしてまた、来賓の笠政務官、長島先生、そしてまた御来場いただきました皆様方に心からお礼を申し上げまして、私の挨拶といたします。

どうぞ皆様方、きょうの記念講演を楽しんでいただければと思っております。どうぞよろしく願いいたします。(拍手)

司会：徳永所長、ありがとうございました。

引き続きまして、OECD 教育局、アラスター ブリス氏より、共催者を代表しましてごあいさつ申し上げます。

アラスター ブリス様、よろしく願いいたします。

3. 共催者挨拶

アラスター ブリス 経済協力開発機構教育局アナリスト

こんにちは。ありがとうございます。文部科学大臣政務官、そして徳永所長、私、心から OECD を代表いたしまして皆様にお祝いの言葉をお話ししたいと思います。

そして私、特に国立教育政策研究所に対しまして、このような機会を与えられたこと、そして素晴らしいホスピタリティに対して感謝したいと思います。

また同時に、多くの皆様に御参加いただいたことに厚く御礼を申し上げたいと思います。大変刺激的な素晴らしい記念講演会、そして表彰式であると思います。

司会：ありがとうございました。

ただいまから、OECD / CELE 学校施設好事例集表彰式を行います。

OECD 教育局、アラスター ブリス様、お願いいたします。

Ⅱ． OECD/CELE 学校施設好事例集(第4版)表彰式

1. 表彰の趣旨

アラスター ブリス氏：

第4回学校施設好事例集において、166件の申し込みが33カ国のほうから提出されました。いずれも興味深い内容でありましたが、審判団といたしましては、この「ふじようちえん」こそが最もいい例だということで、学校施設としては素晴らしいというふうに使われたのであります。

なぜかといいますと、ここにおいて、教育環境として一番いい環境、つまり園児たちのニーズに応じて、また、地域社会のニーズに応じている。それは刺激に富む、また同時に、お互いに遊びを通じてコミュニケーションを図る場となっております。

昨日、幸い私は、園長先生、また、建築家の方々によって「ふじようちえん」を訪れたわけでありませう。私自身参りまして、素晴らしい学習環境だということを確認することができたのであります。

私ども CELE を代表いたしまして、学校法人みんなのひろば藤幼稚園によって設立された幼稚園であります、「ふじようちえん」に対して表彰させていただきたいと思ひます。そして、これが第4回の効果的学習環境センターにおける好事例として表彰される運びとなった次第であります。

司会：

OECD / CELE より、「ふじようちえん」の設置者であります学校法人みんなのひろば藤幼稚園に対し表彰状の授与を行います。

園長であります加藤積一様、壇上をお願いいたします。

アラスター ブリス氏：

おめでとうございます。ぜひこの表彰状を受け取っていただければ幸いです。そして、この幼稚園の将来の御多幸を祈っております。おめでとうございます。(拍手)

司会：

それでは、園長であります加藤積一様より、賞を受け、一言お願いいたします。

2. 学校法人みんなのひろば藤幼稚園表彰 及び 園長先生からのお言葉

加 藤 積 一 学校法人みんなのひろば藤幼稚園 ふじようちえん園長

加藤積一氏：

改めまして、学校法人みんなのひろば藤幼稚園園長をしております加藤積一と申します。

ただいまこのような本当に荣誉ある、言葉にならないぐらい大きな大きな表彰をいただきまして、本当に感謝、そしてまた感激をしております。これに関係いたしました、今日いらっしゃいますけれども、OECD並びにその関係者、また、笠政務官、また、いつもお世話になっております長島先生、いろいろな方に大変お世話になりました。そして、このような形でいただくことができました。本当にありがとうございました。

そして、学校法人みんなのひろば、みんなのひろばと言っておりますけれども、当て字では「地球のひろば」といつも私ども書いております。できるだけ地球に育つ人間としてといいますか、小さい子どもでありますけれども、私はよく、日本人という殻を破って地球人になってほしいというような思いで子どもたちと接しております。

たまたまなのですけれども、今年、当法人が設立させていただきまして40周年を迎えております。40周年に至るまで、子どもさんに対して、我々モンテッソリー教育を基本とした教育をさせていただきながら、いろいろな方に御指導いただいて今までやっていくことができました。このように大きな大きな賞をいただいた、これを糧に、また教育と建築、そしてまた子どもが育つ状況といいますか、そういうのを今後さらにみんなで考え、そして、未来をつくる子どもたちのために一生懸命頑張っていきたいというふうに思っております。幼児教育は、私は国をつくる力があると思っております。世界をつくる力があると思っております。そんな思いを込めて今後とも頑張りたいというふうに思います。

本当に皆様、どうもありがとうございました。(拍手)

司会：

加藤積一様、どうもありがとうございました。

3. 建築家 手塚貴晴＋手塚由比氏 表彰

司会：

続きまして、OECD / CELE より、「ふじようちえん」の設計者であります建築家手塚貴晴様、手塚由比様に対し、表彰状の授与を行います。

それでは手塚先生、壇上をお願いいたします。

アラスター ブリス氏：

こういったプロジェクトというのは、やはりコミットメントが建築家の先生方のほうからなくしては実現でき得ないわけです。建築家の先生方がユーザーである幼稚園とともに築き上げたものであります。クリエイティビティとスキルをもってして手塚貴晴さんと由比さんがこの建物を設計され、その中にはユーザーを第一に置くという思想が流れているのであります。

OECD / CELE を代表いたしまして、手塚貴晴さんと手塚由比さん、お二方に対して、「ふじようちえん」を建築されたということで、特別な賞を授与させていただきたいと思えます。これは OECD の第4回学校施設好事例集において表彰させていただくというものであります。おめでとうございます。(拍手)

司会：

皆様、盛大な拍手をお願いいたします。(拍手)

続きまして、文部科学大臣政務官、笠浩史様から御祝辞をちょうだいいたします。よろしく願いいたします。

4. 祝辞

笠 浩 史 文部科学大臣政務官

本日は、皆様、この表彰式並びに記念講演会にお集まりをいただきありがとうございます。

ただいま表彰を受けられました「ふじようちえん」の関係者の皆さん、本当におめでとうでございます。

このたびの「ふじようちえん」の受賞は、世界33カ国から推薦された166プロジェクトの中から最も傑出した作品として選ばれた大変栄誉のある賞であり、日本の教育施設の水準の高さを広く世界に知らしめてくれたものと思います。

実は先ほど御紹介ありましたように、私、11月4日に OECD の教育大臣会合に参加をしておりました。この4日の日に行われた総会の締めくくりに議長からこのことが報告をされて、まさに最高得票ということで、「ふじようちえん」の施設の名前だけが紹介をされ、大変な称賛をいただいたところでございます。そういう意味においても、本当に今回の受賞というのは大きな、私どもにとりまして日本にとっても大変名誉あることだと思っておりますので、本当にこの賞の大きさというものを是非とも今日御参加の皆様方にも、ともに喜び、今後の学校教育施設のさらなる充実推進につなげていきたいというふうに思っております。

幼児期の教育は生涯にわたる人格形成の基礎をつくる重要なものであり、義務教育やその後の教育の基礎を培うものであります。

本日、表彰を受けられた「ふじようちえん」をはじめ手塚建築研究所、また、関係の皆様方におかれましては、今後とも学校教育やその環境整備の充実、発展に引き続き、御尽力を賜りますようお願いを申し上げます。

結びになりますけれども、本日、このような素晴らしい記念講演会を主催していただいた国立教育政策研究所とともに、御尽力をいただいた OECD / CELE の皆様方に感謝を申し上げまして、お祝いの言葉といたします。

平成23年1月19日、文部科学大臣政務官 笠浩史。

本日は誠におめでとうございます。(拍手)

司会：文部科学大臣政務官、笠浩史様、ありがとうございました。

また、本日の表彰式には、衆議院議員、長島昭久様、また、文部科学省大臣官房文教施設企画部長、辰野裕一様、文部科学省大臣官房文教施設企画部技術参事官、岡誠一様、以上3名の方々に来ていただいております。

以上をもちまして、OECD / CELE 学校施設好事例集表彰式を終わりに致します。

笠政務官は御退席されます。笠政務官、どうもありがとうございました。

Ⅲ. 記念講演

記念講演

司会：

これより記念講演を行います。

本日の記念講演は四部構成で行わせていただきます。

最初の記念講演では、OECD / CELE より受賞されました「ふじようちえん」の設計者でいらっしゃる手塚貴晴、手塚由比先生から、「ふじようちえん」の設計を振り返り、お話をいただきます。

その後、一旦10分の休憩を挟みまして、次の記念講演では、「海外における学校施設づくりの動向」といたしまして、経済協力開発機構教育局アナリストのハンナ フォン アレフェルド氏から「未来の学校の姿と機能－未来の学習環境」についてお話をいただきます。

その後、同じく経済協力開発機構教育局アナリストのアラスター ブリス氏から「海外の先進事例の紹介－OECD / CELE 学校施設好事例集を通じて」についてお話をいただきます。

また、本日の最後の記念講演として、東洋大学工学部教授の長澤悟先生より「長年にわたり海外の学校建築を視察してきたことを通じて」ということで、海外の学校建築についてお話をいただきます。

また、お手元の資料に入っておりますアンケートには、今回の記念講演についての御意見などを御記入いただき、お帰りの際に受付でお渡しください。

それでは、これより記念講演に入らせていただきます。

「ふじようちえんの設計をふりかえって」と題しまして、手塚建築研究所の手塚貴晴様と手塚由比様に御講演をいただきます。

手塚先生、よろしくお願ひいたします。

記念講演



ふじようちえんの 設計をふりかえって

手塚 貴晴 + 手塚 由比 氏
手塚建築研究所

手塚 貴晴 氏

1964 東京生まれ
1987 武蔵工業大学卒業
1990 ペンシルバニア大学大学院修了
1990-1994 リチャード・ロジャース・パートナーシップ・ロンドン勤務
1994 手塚建築研究所を手塚由比と共同設立
1996-2003 武蔵工業大学専任講師
2003- 武蔵工業大学准教授
2005, 06 ザルツブルグ・サマーアカデミー教授
2006 UC バークレー客員教授
2009- 東京都市大学教授

手塚 由比 氏

1969 神奈川生まれ
1992 武蔵工業大学卒業
1992-1993 ロンドン大学バートレット校
(ロン・ヘロンに師事)
1994 手塚建築研究所を手塚貴晴と共同設立
1999- 東洋大学非常勤講師
2001- 東海大学非常勤講師
2006 ザルツブルグ・サマーアカデミー教授
2006 UC バークレー客員教授

外部環境と一体化した空間設計を得意とする。住宅から公共建築まで広く手がける。作品は博物館、病院、学校から住宅まで多岐に渡る。代表作は屋根の上で生活が展開する「屋根の家」や深さ5メートルの雪の下に埋もれる自然科学館「森の学校キョロロ」。「ふじようちえん」では、一周200メートルの楕円型の屋根上空間を形成。箱根彫刻の森のパビリオン「ネットの森」はポリウムにして320m3本数にして589本の木を積み重ねて作っている。グッドデザイン金賞、日本建築学会賞他多数受賞。

手塚 貴晴氏：

(スライド1) 最初の部分だけ、ちょっとだけ英語でやらさせていただきます。お二方、選んでいただいた、海外からわざわざ来ていただいた方に伝えなくてはいけないものですから。

荣誉ある表彰状をいただきまして、本当に私、光栄に思っております。これは建築というよりも、本当に深い意味があります。それは、人生の中でずっと大切なこと。建築というのはなぜ存在するかというと、人間が存在するからです。ですから、この幼稚園

園は、建築のためではなく、人間のため、子どものための幼稚園であるということ。そうしたことから、「ふじようちえん」は世界的にもこのように優秀な学校建築施設と認められたのだと思います。これから教育施設に関しまして、日本、そして世界において道標になることを心より願っております。

それでは、これから日本語で話します。

本当にこのような賞をいただいて我々は幸福だと思っております。

まず、建物の説明をする前に、我々の話をすると皆さんリラックスなさるので、そういう話の仕方をしたほうがいいと思ひまして、私、青いシャツを着ております。これは実は紀宮さんにお会いしたときもこのTシャツを着ていて、周りの方から怒られたのですけれども、これは実はいつもきれいなTシャツでして、同じTシャツを100枚以上持っております。ですから、ちゃんと洗濯しております。

私の妻はいつも赤で、またいっぱい持っていて、実は置いてきてしまったのですけれども、iフォンを持っていて、iフォンも青いのです。時計も青くて、うちの奥さんは赤いのですけれども、実は2人で共有するものは黄色にしようということになったので、娘は黄色でございます。そうこうしているうちに息子が生まれまして、本当は息子は黄色にするはずだったのが、娘が黄色をとられるのは嫌だと言ひ出しまして、娘が息子の色を緑にしまして、青、赤、黄色、緑、そろっております。

何でそんな話をするかと申しますと、本当に我々の建築というのは、実は建築そのものが目的ではなくて、そこにある人、我々にとって実は家族というのは非常に大切なのです。よくアトリエ事務所といいますと、いわゆる作品をつくるということに一生懸命で、もちろん我々、作品をつくることに一生懸命になるのですけれども、それ以上に我々は家族というのが非常に大切であります。我々の事務所もそういうものを大切にしております、うちの事務所というのは10時まで来るなという話をしております、そのかわり、例えば産休もとっていいし、とにかく家族を大切にしてください。みんなで自転車レースを組んだり、サッカーをやったりします。よくうちの所員に言うのは、まず君たちが人の幸せというのが何だか知らない限り、あなたは幸せを提供する建築家にはなれない。建築家というのは建築を提供する人ではなくて、人の幸せを提供するのが仕事ですよというお話をします。

今回は、本当は「ふじようちえん」だけの話をするはずなのですが、あえて屋根の家という小さな小さなプロジェクトから始めようと思ひます。それが実は今回のプロジェクトの始まりでした。

それでは、私のパートナーの手塚由比のほうにかわろうと思ひます。



スライド1

手塚 由比氏：

(スライド2) これは私たちが設計した住宅ではありませんで、屋根の家のクライアントが私たちに住宅を頼んできたときに住んでいらっしゃった家なのです。最初に私たちがお会いしたところがここだったのですけれども、お話をしたときに、うちの家族は屋根の上で御飯を食べるのが好きなのですよと行って、案内されたのが、2階の窓から腰壁をひよいとまたいで出る小さな屋根、この小さな屋根で、御家族4人なのですよけれども、よく出て御飯を食べるといってお話を伺ったのです。それはすごい、信じられないなと思っておりましたら、(スライド3) 証拠写真が出てきまして、この家のお嬢さんなのですよけれども、畳3畳ほどの小さな屋根で、皆さんでここに並んでおにぎりを食べられるらしいのです。もちろん屋根ですから手すりもないし、急だし、この辺の瓦なんか落ちかけていますけれども、危ないとか言いようがない。それはすごいなということで、これでは屋根の上で御飯を食べられるように設計しようと思いついたのが始まりでした。(スライド4) 2週間後にはこの案を思いつきまして、クライアントのところに行っていったのですけれども、ちょうど敷地が住宅地の端っこだったのです。目の前がずっと谷になっていて、向かいに弘法山という山が見える、そういうすごくいい場所でした。敷地が91坪と広がったので、思い切り平屋にして、大きな屋根を乗せると。上で御飯を食べるから屋根に全面木デッキを張ってということをしています。

大事なものは、屋根と屋上は違うのです。屋上は平らだけれども、屋根は傾いている。傾いているだけでいいことがありまして、今日はいらっしゃっている年齢層があれなのですよけれども、皆さんデートとかなさるときに、公園とかに行かれると思うのですが、公園とかでカップルが座っているところというのは、平らな広場のど真ん中にはあまり座っていないくて、ちょうどちょっと傾いた斜面に並んで座って話をしているのですね。

手塚 貴晴氏：

ちょっとお話ししましょう。私、大学の教授をしておりますけれども、学生たちに、最初のデートをするときにマクドナルドへ行ってはだめだよと話します。マクドナルドの方いらっしゃらないですよ。何かというと、マクドナルドへ行くと、小さなテーブルで、彼女なり彼氏、初めてデートする相手と面と向かって話し続けなくてはいけないのです。ところが、30分ぐらい話し続けると、だんだん言うことがなくなって、沈黙が訪れて、実に気まずい雰囲気になるのです。大体そこで失敗してしまうのは、静



スライド2



スライド3



スライド4

かになってしまうか、余計なことを言って振られてしまう。

ところが、どういうところに行けばいいかと話を私たちよくするのは、多摩川の河原に行くと斜面があるのです。そこに行くと、斜面に座ると、傾いているものですから、どうしても同じ方向を向いて座らなくてはいけなくて、顔を合わせないと、この沈黙が30分間続いても、これが気まずくならないで、非常にロマンチックな雰囲気になる。

二つ目として、魚が跳ねたねとか、そういう恥ずかしい話が、これが非常にうまくいって、また次の機会につながったりする。それから次のアクションとかいろいろあるのですけれども、その話は、ここは文部科学省なので次の話はできないですけれども、とにかく斜面というのは非常にいろいろなアクティビティを起こす。

実際、実は我々、アカデミックにいろいろな広場の調査をしました。そうしたら、ポンピドーセンターの前の広場とか、メルボルンの広場とか、シエナのカンポ広場だとか、人が集まっている広場というのは実は傾いています。平らな広場というのはあまり集まらないのです。実は、例えば天安門広場とか、トラファルガー・スクエアとか、世界の有名な広場で平らなところというのは、観光客が行ったり来たりするだけで、だれもとどまらないのです。

なるほど傾くというのは非常に大切なことなのだなということで、ここでも屋根が傾いているということをおお切につくったのがこの建物です。

手塚 由比氏：

ちょうど傾いているから、寝転がったり座ったりするのにちょうどいい感じになっております。

では屋根に上がるのにどうしようと。(スライド2) 前の家では、こういう腰壁をまたいでひょいと出たのです。(スライド4) 何か本当に窓から外に出るなんてやってはいけなのですけれども、そういうやってはいけないことをする感覚が大事だろうということで、ここでは屋根に上がるのに天窓をつけました。ぽこぽこ天窓をつけて、その天窓に自分のはしごをかけて、屋根の上に好きなときに上がれるようにいたしました。

そうしたら、ここの家の妹さんが、子供の寝室の天窓は私の天窓とか言い出して、お姉さんが、じゃ勉強室の天窓は私の天窓とか言って、お父さんが、じゃ主賓室の天窓は私の天窓にしようとか言って、奥様が、じゃあ、キッチンの天窓は私の天窓だわとか言い出して、家族みんながそれぞれ自分の天窓を持っていると。自分の天窓に自分のはしごをかけて、好きなときに上がってこられるということになりました。

そうしたらクライアントが、夏は暑いからシャワーをつけてくださいということで、私たちはシャワーをつけるデザインをしました。冬は寒いからストーブをつけましょうということで、最初はストーブをデザインしてはいたのですけれども、これはちょっと予算の関係でなくなりました。それから、屋根の上だけ、ちょっとくらいはプライバシーを守りたいわねという話もありまして、ここに小さな壁をつくりました。設計当初はちょっとこの角を削っていたのです。それはなぜかということ、この家の奥様が、おばあちゃんがこっちの方向に住んでいるから、毎朝屋根に上がっておばあちゃんが生きているかどうか

か確かめたいとおっしゃったので、ちょっとこの辺を削っていたのですけれども、結果的には低い壁をつくりました。御飯を食べるからテーブルも必要だろう、ベンチも必要だろう、キッチンも必要だろうということで、キッチンもついています。

それから、私たち、一応屋根の家も確認申請は出して通しているのですけれども、確認申請を通す上には、手すりもついていなくてはいけなかなという話をクライアントにいたしましたら、クライアントが、手塚さん、見てください、どこの家の屋根に手すりがついていますかと。この家の屋根にもありません、この家の屋根にもありません、屋根には手すりはないものですよと説得されまして、手すりを付けておりません。

(スライド5) これが御飯を食べているところです。この家族にとって、これは非常に日常の風景です。ところが、この住宅が住宅特集という雑誌に出たときに、あるクリティックの方が、屋根の上で御飯を食べるなんて、そんなのは建築家が勝手につくったフィクションにすぎないというふうに書かれてしまったのです。そうしたらクライアントの方が大変に怒っておりまして、そのクリティックの方が、屋根の上は、夏は暑い、冬は寒い、そんなの出られるわけじゃないかみたいなことを書かれたのですけれども、そうしたらクライアントの方は、夏は暑いから明け方か夕方に出るのです、冬は寒いから昼間の暖かいときに出るのです。何でそんな簡単なことがわからないのでしょうかねと、抗議文を書かれていらっしました。私たちは本当にこのクライアントから、人間はつい環境を機械で思い切りコントロールすることばかりを考えているのですけれども、そうではなくて、当たり前気持ちのいい環境を選んでいけば気持ちよく過ごせる、そういう当たり前のことを教えてもらったような気がしております。

(スライド6) これはキッチンです。この住宅は私たちがつくった住宅の中でも最も安い住宅の一つなので、非常にひどいキッチンがついています。ガステーブルもつけたかったのですけれども、東京ガスが許してくれていませんで、電気ヒーターを置いて料理ができます。

(スライド7) これはシャワーです。最初、私たちは、きっとこの家の小さいほうのお嬢さんが夏に水着を着てシャワーを浴びるのだらうなと思ってデザインしたのですけれども、ある日、家ができてからクライアントから電話がかかってきて、手塚さん、台風の中で熱いシャワーを浴びたら気持ちよかったです、感動の電話がありました。私たち、大丈夫ですか、そんなことして、とお伺いしましたら、奥さんは、Tシャツ着ていたから大丈夫ですよとさりげなくおっしゃっていました。

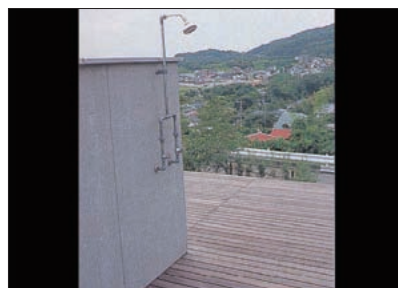
(スライド8) こんなふうに天窓にははしごをかけて、どこからでも上がれるようになっています。(ス



スライド5



スライド6



スライド7

ライド9) どの天窓も手で簡単にあけられるようになっています。(スライド10) 上からのぞく等、いろいろなことができる。(スライド11) 屋根の上にいると、子供がいろいろな天窓から上がってくるのです。そうすると、屋根の上にいると、もぐらたたきゲームって昔ありましたけれども、そんな感じでハンマーを持って天窓から出てくる子供をぼんとたたきたくなるような、そんな感じで子供が出たり入ったりする天窓になっています。

(スライド12) こんなふうに赤い人と青い人が屋根の先端のところに座っていると、(スライド13) 赤い靴下と青い靴下が見える。要は屋根が薄いのです。屋根が薄いことは、構造的には非常に木造でいろいろ工夫してこうなっているのですけれども、重要なのです。屋根というのは、屋根の上の生活と下の生活の境界になっているので、それができるだけ近くなるように、トータルの厚さが15センチしかないのですけれども、薄い屋根を設計しております。

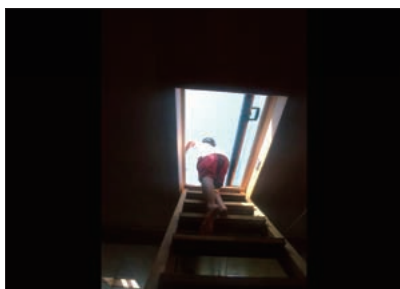
ここで選手交代します。

手塚 貴晴氏：

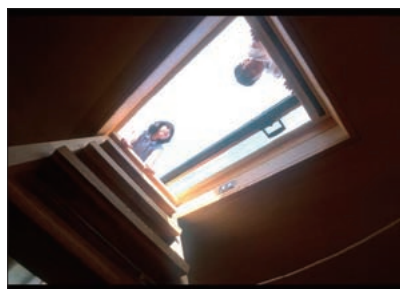
(スライド14) 実は屋根の家を私たちの友人の佐藤可士和というユニクロのプロモーションをやっている人間ですけれども、彼が紹介してきまして、この幼稚園建てかえない？という話になって、私たち、この幼稚園、「ふじようちえん」の古い建物ですけれども、佐藤可士和と一緒に見に行きました。結論は、建て替えるのはやめましょうと説得しに行ったのです。いいじゃないですか、雰囲気。何がいいって、全部外廊下で、園長先生が一々それぞれの部屋に入り込んで出てくる。園長先生は、実は豊半畳ぐらいの園長室に座っていて、入りきらないので出ているのですという話をしていたのですけれども、ずっと回っているのです。いいのは、それぞれの部屋に入ると、子どもたちの歓声が上がって、どの部屋にいても、実は園長先生が自分の担当だと思っている。この園長先生、実はすごいところが一つだけありま



スライド8



スライド9



スライド10



スライド11



スライド12



スライド13

して、600人の園児の名前を全員覚えている。これはなかなかできない。私は絶対できません。私の研究室の学生でも、私、覚えていないのですけれども、すごいと思うのです。

それで、何か考えなくてはならない。(スライド15) もともとここに建物が七つぐらい張りついていて、廊下の両側に行き止まりがあったのですけれども、それぞれの部屋をずっと回ることが楽しみである園長先生は行ったり来たりしているうちにだんだん疲れてしまったので、これを丸くしたら、どこが終わりかわからないから、先生はずっと1日中回ってくださるかなと思って、丸くしたら、本当に回ってくださって、うまくいったかなと思っています。

それからもう一つは、先ほどお話したように、私たち、黄色と緑の子どもがおります。子どもというのは、一つだけおもしろい特徴を見つけまして、何かものがあると、その周りを2人で1日中回っているのです。これはいわゆる子犬がしっぽをくわえようとして回りますよね。あれと同じ現象なのです。遺伝記憶だと思えるのですけれども、では丸くしたら1日中回っているから、多分、この幼稚園の子どもは強くなるだろうということで丸くしたら、こんな形になりました。

(スライド16) それから、ここに大きな木がある。一番大きな木は27メートルあります。表参道にこんな大きい木はありません。それを切らないでいこうと。(スライド17) 木を切らないというのは難しいことなのです。発掘調査みたいに土をほじくり返したりしまして、どこに根があるか調べて、木を避けて実は建物をつくっています。木の根は切っておりません。こんなのができました。

ここで先ほどの話が大事になるのですけれども、屋根の家というのは、実は政府側の方の家なのですけれども、手すりがないですよ。この園長先生も何を言い出したかといったら、手すりはほしくないですという話になってきて、幼稚園で手すりがないと、私、訴えられてしまうのですけれどもとお話をしたら、軒先にネットを出して、落ちてくる子どもを受けとめるのはどうですかという話がありまして、



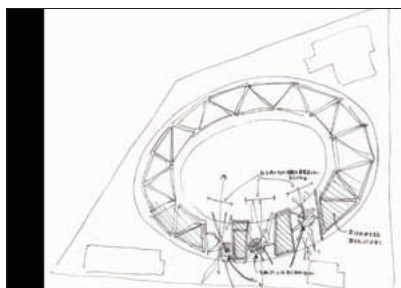
スライド14



スライド15



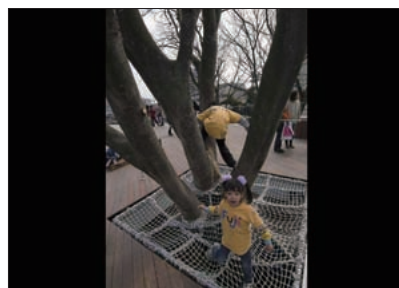
スライド16



スライド17



スライド18



スライド19

なぜかこの園長先生はかなり過激で、私、説得されまして、確認申請機関に行ったら、あなた大丈夫ですかと言われて引き返してきまして、だけどまた説得されて行ったり来たりしているうちに、では木の周りだったらそのアイデアは維持していいよというふうに言われて、正直言って姉齒さんの事件以来、これは許されないと思うのですけれども、こういうことが許されました。手すりも非常に軽いのがついています。

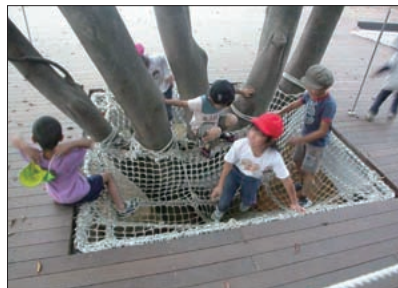
そうすると、これが本当は実は手すりなのですけれども、子どもにとって手すりなんか全然関係ないんですね。(スライド19) わざわざ落ちに行きます。(スライド20) そうすると、落ちていく子どもがどんどんふえていくのです。(スライド21) 放っておくと、1本の周りが40人以上になってしまって、子どもは木が好きなのです。(スライド23) この子なんて木を食べていますよね。だめなのです、大好きなのです。

(スライド24) それから、手すりですけれども、実は手すりのモックアップをいろいろ作りまして、実は太いのと細いのを作ったのです。太いのは揺れない。実は壊れないというパラメーターでやると、結構細くできるのです。普通は揺れると嫌なのです、皆さん。ところが園長先生と副園長先生に見せたら、この揺れるのがいいですとか言って、もともと手すりがないほうがいい方たちなので、逆に私たちが説得され、私たちはもうちょっと太いのを一生懸命やろうと思っていたのですが、これがいいということになりました。ただ、この幅というのは10センチという、子どもたちの頭が通らないけれども、手と足が通るといえるのをつくりました。(スライド25) そうしたら、この端っこに座る子どもたちはまたかわいいんですね。動物園ですね。

(スライド26) これはえさをあげているところなのです。違います。そうではなくて、これは農業のクラス。「ふじようちえん」ですごいのは、実は田んぼとか畑とかたくさん持っていらっしゃって、そ



スライド20



スライド21



スライド22



スライド23



スライド24



スライド25

こでつくったものを子どもたちに食べさせる。前に段ボール箱1個、ダイコンをもらって、こんなのもらっていいのですかという話をしたら、いいです、あと4,000本ありますけれども、いかがですかと言われて、本当に全部そういうものをエディケーションに取り入れているというすごいところです（スライド27）。

（スライド28）もう一つ特徴は、実は天井高が非常に低いのです。2.1メートルしかないです。実はこの基準、ちょっといろいろあって撤廃されたのですけれども、昔は3メートルなくてはいけないという話があったのです。ただ、ここのときはどうしてもこれをやりたいという話で、要は屋根が高いと、屋根の上で起きている子どもたちが見えなくなってしまうのです。幼稚園建築ですごく大事なところは、死角がない。こうすると、実は屋根のところ、先ほどの話ではないですけれども、傾いているのです、内側に向かって。そうすると、屋根の反対側にいる子どもが一番奥にいても見えるのです。下にいる子ども、全部が見えるという、そういう空間が出来上がっています。こういう感じです。

（スライド30）ここに最初は緑を張っていなかったのです。ここに何で山があるかという、直線階段だと子どもが落ちて首が折れたら大変だという園長先生の話があって、このくらい短くすれば腕が折れるぐらいで大丈夫かもしれないという話があって、このくらいの長さになりました。最初、この緑がなかったのですけれども、そうしたらいろいろと問題がおきまして、（スライド31）最初は冬だったから植えられなかっただけなのですけれども、子どもたちはどこの土がやわらかいかというのを知っているのです。600人の子どもたちが土をちょっと持って帰ると、ダンプカー1回分の山がそれぞれの御家庭に持って帰られてしまっていて、なくなってしまうという現象が起きて、これなんか足していた、竹中工務店の所長さんはブーブー文句を言っていました。

（スライド32）何でこういうふうになっているかという、屋根に膨大なケヤキの葉っぱが積もります。それが集まってここから出てきます。大雨のときはここに滝ができます。ここに葉っぱがたまります。



スライド26



スライド27



スライド28



スライド29



スライド30



スライド31

(スライド33) 今どきの子どもは雨と水との関係をよく知らないのです、こんなものですよということを、おもしろいのは、この幼稚園は全部建築を教育にすべて役に立てています。

(スライド34) これは何かというと、普通、幼稚園の足洗い場というのはコンクリートの洗い場があって、壁が立って、そこから突き出しているのですけれども、そうすると以外と流しがみんな詰まって、縄文遺跡みたいに地面から10センチぐらいのところ埋まっていたりするのです。もちろん高い、青山学院の幼稚園とか、そういうところはきれいにしているのですけれども、普通の幼稚園はみんな埋まってしまうのです。何でかなと思ったら、小さい女の子が出てきまして、排水溝に一生懸命土を詰めて、穴を詰めて、みんなプールをつくらうとするのです。これはだめだということで、実はこの下に水槽が埋まっています。その上にこういう丸太を並べて、すき間から水を流すということをやっています。地面から生えている植物みたいなのがいいなということで、いろいろなところがありまして、これは友達に水をかけるのに実にいいのです。自由に動くのです。ここにシャワーがあって、プールに水を入れるための大きなのがあって、これは普通のなんですけれども、この子は何をしているかということ、靴を洗っているのではなくて、靴の中に水を入れているのです。なかなかかわいいのですけれども、これが実は大事なスライドです。

私たち、この建物はものすごくローテクに見えますけれども、実は大変にハイテクなのです。例えば、この柱はものすごく少ないです。建築の表現とすると、どういう格好いい柱をつくるかという話になるのですけれども、これは子どもの動きの邪魔にならないようにところにだけ柱をどうしようかということ考えたのです。だからものすごくロングスパンで、柱の直径は150ミリしかないです。ですけれども、実はこの建物に4,000人の人が乗って、阪神大震災が来ても壊れない、そういう強度を持っています。振動解析もしました。超高層の解析より難しかったと構造設計していた人が言っていたのですけれども、振動解析、時刻歴解析というのですけれども、そういうのもかけております。

それから、このサッシ、このレールというのは実は真っ直ぐではないのです。行ったり来たりしているのです。ここは通るかなといいながら、膨らませたりへこませたりしたものですから、一つの曲率ではなくて、そこのところを電車が走るように作らなくてはいけないということで、実に複雑な車輪が入っています。それから、屋根が振動するので、それを吸収する特別なディテールも入っています。

それから、この中の空間、全部コンピュータの中で3Dでつくりまして、三次元でつくって、音響解析もしております。だからどのくらいの残響時間になるかということのも、実はコンサートホールと同レベ



スライド32



スライド33



スライド34

ルのスタディが出されてできております。ですけれども、それは見える必要がない。

例えば、この幼稚園ですごいところというのは、部屋と部屋間の境界が箱だけなのです。隣の音が聞こえてくる。そうすると、何がすごいのか。これは園長先生の言い方だと思っておりますけれども、ノイズというのは子どもの教育にすごく大切だと。今、どんどん静かな空間をつくらうとしているのだけれども、どんなに静かにしても隣の音は聞こえてくる。それよりも、例えば渋谷に行ってもどこへ行っても、友達と話をする事ができる、やっぱり今の子どもに必要なのは、うるさいノイズの中で自分に必要な情報を得る力を身につけることだと。確かに昔の校舎というのは遮音性がなくて、隣の国語の授業の音が算数の授業をしている部屋に聞こえていたけれども、ちゃんと聞き取れたのです。やっぱりこういうのは大事だと思います。

実はこの幼稚園で何回かテレビの放送があったのですけれども、そのときテレビカメラの方が、この幼稚園の子どもはすごいと。普通の小学校とか幼稚園でテレビ撮影をすると、必ずテレビのところに集まってしまって、全部授業がとまってしまう。ところがこの幼稚園は、はい、と先生が声をかけると、バシッとみんな先生のほうを向くのです。これは教育というものもあると思うのですけれども、こういうフリーな雰囲気があるのかと。

それからもう一つ、これは教育関係者の方はいつも悩まれていると思います、いじめの問題。この幼稚園の先生たちと話すと、驚くことなのではございますけれども、いじめはありませんと言います。要は視認性がいい、それから、話になったのは、要は檻の中に人間とかサルを閉じ込めると、必ずヒエラルキーをつくって、一番下のカーストになった人間とかサルがいじめられるのですけれども、境界が消え去った途端にそれがなくなる。実際行ってみると、本当にそれはあります。実は行動心理の専門の教授がそれをずっと追いかけています。これはすごいことだと。建物がいじめを撲滅するという話です。

私、よくiフォンの話をします。要は建築というのはものではないです。iフォンが何ですごいのかという話をちょっとするのでございますけれども、iフォン自体のデザインがすごいのではないのです。非常に人間に近いのです。だから実はソニーが負けてしまったのです。20世紀には、「モダンタイムス」という映画があって、人が技術に合わせる、機械に合わせる、それがだんだんコンピュータにとってかわると、「トロン」という映画があって、最近トロン：レガシーってやっていますけれども、その映画を見てみると、人がコンピュータの中に吸い込まれて、コンピュータテクノロジーのデザインみたいな感じになって戦うのです。いかにもコンピュータらしいデザインが未来、コンピュータこそ未来だった。20世紀になると、「マトリックス」という映画が出てきますね。コンピュータの中で起きていることというのは現実世界以上にリアルなのです。技術がどんどん進歩していくと、実は技術を見せることが未来ではなくなってくる。これは実はソニーのこういう形態は遅いのです。コンテンツもそんなになかった。ですけれども、これはスイッチを入れるのが簡単で、私たちの娘とか息子がこの上で絵をかくのです。要は説明書も要らない。この大きさというのは手で握ってちょうどいい大きさにしてやる。要はすごいテクノロジーが入っているのだけれども、それを見せようとしていない。

そういうのを実は園長先生が話していて、「ふじようちえん」の標語で「懐かしい未来」というのがあるのですけれども、これこそ懐かしい未来だなど。20世紀は技術に人が合わせる時代だったけれども、

技術が進歩した後、実は技術は人をサポートして、今までになかった未来をつくることができる。これはすごいなと。英語ではノスタルジックフューチャーという言い方で私たちは講演会をよくしております。

(スライド37) これはどうやって部屋を分けるのだろう。毎月といわず、実は部屋の配置がしょっちゅう変わります。部屋の配置を変えるのも教育の一部なので、子どもたちは手伝うはずなのですが、全然手伝いになりません。こんなになって、先生だけが一生懸命働いています。(スライド40～42) これはいじめではないですよ。喜んで入って行ってしまいます。(スライド47) これがクリスマス、自由ですね。

それから、今どきの子どもというのは、どうしても任天堂とかゲームボーイとかばかりと話をしているので、井戸端会議をさせたらみんながお互いしゃべるようになるだろうということで、こういう水道をつくりました。これはまた二つの自在水道を4人の子どもで分け合う。長いのは、手がうまく使えない子でも、いわゆる身障者の子どもさん、障害のある子どもさんでも使えるように、そういう配慮です。(スライド48) 大事なことは、みんなで向き合えば仲よく話すだろうということで、うまくいったかな



スライド35



スライド36



スライド37



スライド38



スライド39



スライド40



スライド41



スライド42



スライド43

と思います。(スライド49) クリスマスのときにも役に立ちます。

(スライド50) それから、建物の中、木がずぼっと抜けています。(スライド52) 園長先生がまたこれを考えまして、ここからひもを垂らして子どもを吊ってみたり、園長先生はこの下にカブトムシを放って、上からカブトムシ釣りをさせたりしています。(スライド53) 下から見るとおサルさんみたいで実にかわいいですね。

(スライド54) これは天窗。よく天窗から人が落っこちて大問題になっていますけれども、この天窗は落ちないです。このガラスはすごく強いガラスで、子どもが乗っても大丈夫で、実は結構、開けたりできるのですけれども、そうするとここにネットがあって、勾配があって、人が通り抜けるとすぐ閉まるようになっています。この下にはしごをかけられるようになっています。二重、三重の安全措置が施されています。おもしろいのは、クリスマスするときになると、ここからサンタクロースがプレゼントをおろしてくる。結局やったのですか、あれ。煙突はないのですけれども、天窗はそれぞれの部屋に1個ずつあると。だからあまり太いサンタクロースさんが来ると、ここに挟まって出られなくなるという現象があるのですけれども。



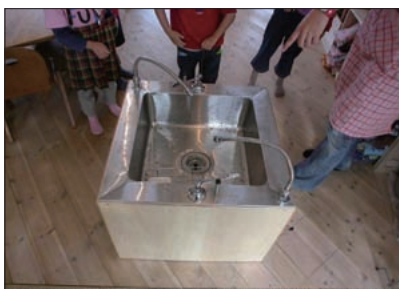
スライド44



スライド45



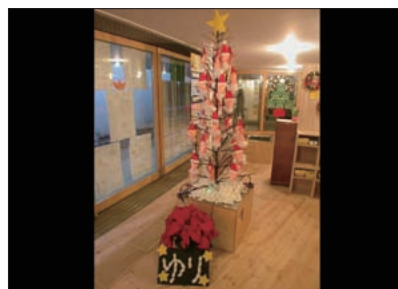
スライド46



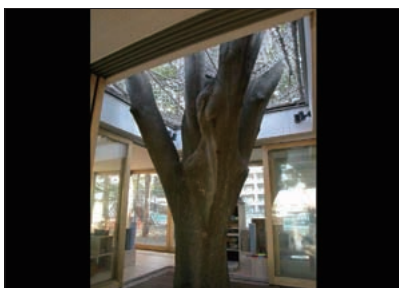
スライド47



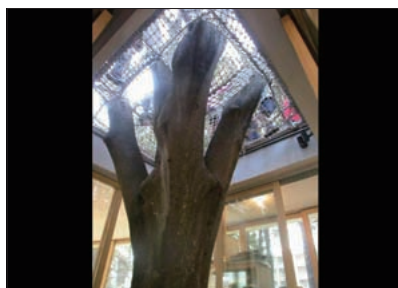
スライド48



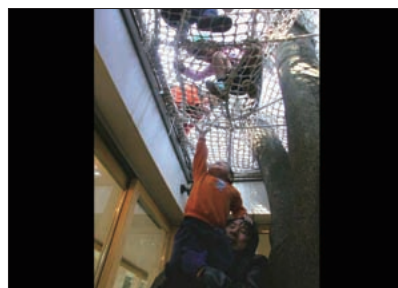
スライド49



スライド50



スライド51



スライド52

(スライド56) それから、今どき、LED、LED という話がありますがけれども、実はそうではなくて、あえて古い電球を使っています。大事なところは、要はそれぞれの機械の一番効率性だけを考えていくとLEDになってしまうのですけれども、実は効率のいい機械を使っているからエネルギーを使っているわけではないのです。例えばプリウスに乗っていても、1日300キロ乗っていけばものすごいCO2を排出する。おもしろいのは、この下に300個ぐらい電球が下がっているのですけれども、ひもが100本ぐらい下がってしまっていて、ひもを引っ張ると三つだけ電気がつくのです。自分の好きなどころだけ電気をつけて、終わったら消す。要はコンシャスネスというのですけれども、エネルギーって何なのだろうということを学ばせるということもここで教育の一部にしています。ですけれども、(スライド57) やっぱりこれも3Dのコンピュータで、どのくらいの明るさになるかとか、端っこのところはタイマーでコントロールしてコンピュータで動かす等、実は最先端のテクノロジーが入っています。

(スライド58) それから、ここにすき間があるのですけれども、何かというと、子どもは当然ほうきでたたかだろろうということで、そのときに割れないようにということで、これが実はルーズになってしまっていて、たたいたらスウェーバックしてエネルギーを吸収してガラスが割れない。照明デザイナーはマイクタイソンディティールと言っているのですけれども、マイクタイソンってわかりますか。そういうことを言っています。

(スライド59) これが幼稚園。今、緑の中庭になっております。これはまた芝刈り機という話があったのですけれども、この園の中で芝刈り機を見たことがない、どこかにあると思うのですけれども、先生は馬を飼っていらっしゃるしまして、馬に食べさせれば芝が短くなるだろうということで、庭で一生懸命馬が芝を刈っています。そういうことを考えていらっしゃいます。

(スライド60) これはちょっとアカデミックになりました。これはいわゆる小林先生という行動心理



スライド53



スライド54



スライド55



スライド56



スライド57



スライド58

の先生がいらっしゃるのですけれども、その方が、どのくらいのゲーム、遊びがこの幼稚園にあるだろうと。調査したところが、普通の幼稚園の8倍ぐらいの種類のゲームがあるのです。要は遊具というのは、こういうふうに遊びなさいということ子どもに言うてしまうのですけれども、「ふじようちえん」では、何をして遊びたいか自分で見つけなさいと。だから与えるのではなくて見つけさせるという教育の仕方をしていらっしゃいます。だから、何ていうことのない天窓の周りとか、こういうでっぴりの換気扇の周りとか、そういう何ていうことのない建築のエレメントの上で子どもたちは遊んでいます。

(スライド61) それからも一つすごいのは、これは年長さんで6歳の男の子が20分間でどれだけ移動したか。これは外回りで回ると200メートルあるので、200メートルトラックを20分でこれだけ回るといふのは大変なことですね。この男の子、午前中だけで6キロ以上移動しました。6歳の子供を6キロ、午前中に走らせるというは大変ですよ。これは本当の話で、名前もちゃんと控えてある。9時10分から9時30分の間、これだけ回ったのです。これを追いかけた大学院生は、翌日、歩けなかったそうです。ものすごいですね。

昨日も園長先生から話があったのですけれども、どこの小学校へ行っても「ふじようちえん」の子どもたちが必ず駆けっこで1等賞をとる。これだけ毎日6キロ走っていれば、それは早くなりますよね。それから、覚えていらっしゃるかどうかわからないのですけれども、いずれこの幼稚園の子どもたちが将来、オリンピックで中国を負かすという話をしていたのですけれども、本当にそれも起きるかなと思っています。

これはフジテレビで特別番組をやりました。(映像放映)

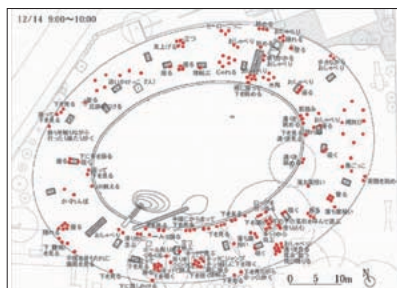
これは毎朝起きています。これは別に走らないとたたくぞとか言って走らせているわけでない、どんどんどんどん本当に走るのです。必要もないのにリレーのバトンを持って走っています。

この番組、一つだけ問題がありまして、日本の幼稚園なのに、実は中国の音楽を使ってしまったという、なかなか厳しいですね、今、日本の状況というものは。

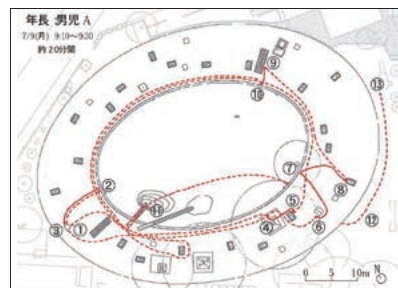
(スライド62) もう一つだけ、実は今進んでいるプロジェクトの一つだけ、実は今進んでいるプロジェクトの一つ。でっかいドーナツをつくったので、今度は小さいドーナツをつくらうということで、このすぐそばに、これは英語を勉強するための塾みたいなものです。幼稚園そのものの施設ではないのですけれども、幼稚園の隣につくらうと。何でかという、そばに米軍基地があって、ともかくその子どもたちと一緒に国際化を進めようという話です。要はかなり地域性に根差しているのですけれども、その



スライド59



スライド60



スライド61

かわり天井はやたら低いです。5メートルの中に、実は7枚、板が入っています。(スライド63) これはできてからのお楽しみと申し上げるしかないのですけれども、(スライド64) この周りに建物が巻きついていまして、木と建物が混じり合ったような建物ができるはずでございます。(スライド65-66) これは作っている最中です。天井高1.2メートルの空間で先生がどうやって教えるのかなと思って。先生の立つところは真ん中にありますけれども、奥に行った子どもはなかなか出てこなくて大変だろうなと思います。(スライド67) それから、照明はホテルを吊っています。ホテルが飛んできて建物にとまりつつあるような照明をつくろうかと思っております。

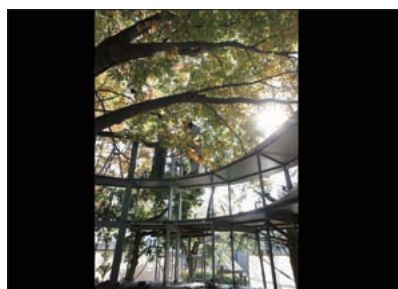
「ふじようちえん」の話はここまでなのですけれども、あと一つだけ、最近やったのでこんなおもしろいのがありますよというのだけ紹介します。(スライド68)箱根彫刻の森の子どもが遊ぶ彫刻です。(スライド69) ここもやっぱり子どもが好きように場所を選ぶのです。ちなみにものすごく大きいです。イスタンブールにあるアヤソフィアという建物がありますけれども、あのドームと同じ大きさがあるのです。これは1個1個、60センチ角ぐらいの大きな木でして、一番小さいのは45センチなのですけれども、日本の木造建築を参照しながら、だけど最先端のテクノロジーでつくった、これもいわゆるノスタルジッ



スライド62



スライド63



スライド64



スライド65



スライド66



スライド67



スライド68



スライド69



スライド70

クフューチャーの一つなのですけれども、(スライド70)ここで子どもたちが遊ぶというのをやっています。(スライド71) これもかなりいろいろな子どもたちが、1日5,000人来ているといったので、相当すごい数だと思うのですけれども、(スライド72-73) 上海万博が1日3,000人ですか、これは上海万博の1.5倍来ているという、(スライド74) こんなのができています。(スライド75-79) これも実は「ふじようちえん」から学んだことが多くて、とにかく子どもたちが自分の遊び場を見つけていく。

(スライド80-81) この写真、いいですね。最高の写真だと思うのですけれども。

(スライド84) それから、建物のほうも家具をつくらずに、建物に人がもぐり込んで使っていく。最初は中で遊んでいる子どもたちが中にいる間、家族が外で待てる場所を作ってくださいと言われてたのですけれども、建物の中ですくうからいいです、いる感じにしましようということをやったら、(スライド85) こういうふうの上ったりします。やってはいけないことは楽しいですね。本当は上らないでくださいという看板がここにあるのですけれども、館員さんは完全に見過ごしています。見て見ぬふりです。(スライド86) 寝たりする。(スライド87-88) これは息子の友達のお姉さんが渡ってみる等、(スライド89) これはうちの奥さんとうちの息子で、(スライド90) とてもかわいいと思うのですけれども、



スライド71



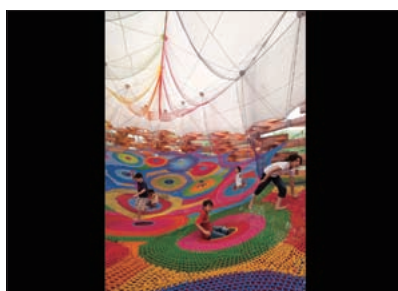
スライド72



スライド73



スライド74



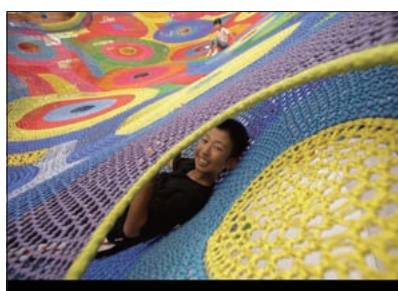
スライド75



スライド76



スライド77



スライド78



スライド79

関係ないですね。

(スライド91) 最後の写真になります。これが我々の乗っている車です。一番格好いい車とは言いがたいのですが、この車のどこがすごいかというと、実はこれは50年間同じデザインをつくり続けています。日本の車は、トヨタでも長くて大体2年ぐらいでモデルチェンジしてしまいます。これは50年間つくり続けたのに、ものすごい数売れ続けた。今でもコレクターが使っているのです。実は驚くなかれ、リッター20キロ走ります。プリウスが30キロといますけれども、リッター20キロってすごいで



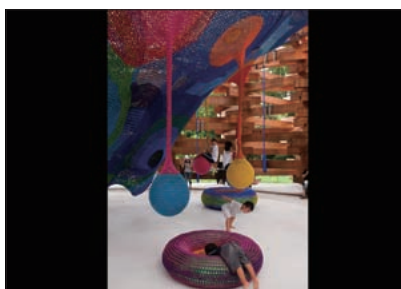
スライド80



スライド81



スライド82



スライド83



スライド84



スライド85



スライド86



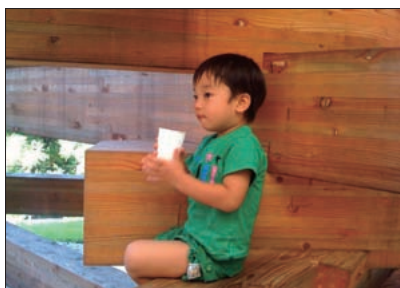
スライド87



スライド88



スライド89



スライド90



スライド91

すよね。仙台まで大体350キロなので、だから本当に20リッターぐらいで行ってしまうのです。ものすごい燃費です。単純に馬力が6分の1しかないという、それだけの話なのですけれども、実はすごく簡単な話です。何でこれが長生きしたかという、実はこの車が丈夫だからではないのです。よく壊れるのです。ですけれども、何が起きているか。例えば夏、暑いときに、屋根をあけて空気を抜きましょうと。そうすると、雨が降ってきたら閉めなくてはいけません。そうすると暑いと思うと、実はここに扉があって、これをあけると前から空気が入ってくる。ただ、そのときに、調子に乗って高速道路に入るところから雨が吹き込みます。中がびしょびしょになってしまうのですけれども、床に水がたまります。おもしろいのは、説明書を見てみると、たまったら床にあるゴム栓を抜いてくださいと書いてあるのです。何かこの車ってすごく人に愛されるのです。

実は最初の屋根の家の方が一つ大事なことを言ってくれて、手塚さんに頼むと、100%満足の建物はできないけれども、100%お気に入りの建物ができますよと。多分建築というのは完璧ではなくて、いろいろと失敗もあると思うのです。ですけれども、「ふじようちえん」も多分100点満点ではないかもしれないです。ただ、一つだけ自信があるのは、100%お気に入りの建築であってほしいかなと思っています。そういうふうになっていますかね。気に入っていただける。やっぱり幼稚園建築というのは、本当は完璧を目指すのではなくて、愛されるものをつくるのがいいのではないかなと。要は子どもと同じなのです、幼稚園建築というのは。自分の子どもに100%を求めることはできませんよね。うちの子どももろくでもないことばかりします。だけどお気に入りなのです。かわいいんですね。やっぱりそういうのが一番いいかなと。だから完全ではないけれども、(スライド92)例えば人がいっぱい乗れるとか、おもしろかったり、(スライド93)荷物がいっぱい乗せることができたりしたら楽しいですよ。(スライド94) やっぱり私たちの建築もこういうのだったらいいかなと思って仕事をしております。

ありがとうございました。(拍手)

司会：

手塚先生、どうもありがとうございました。

それでは、ここで一旦10分休憩いたします。



スライド92



スライド93



スライド94

記念講演



海外における 学校施設づくりの動向

未来の学校の姿と機能
— 未来の学習環境とは
OECD/CELE の取組を通じて —

ハンナ フォン アレフェルド 氏
経済協力開発機構教育局アナリスト

ハンナ フォン アレフェルド 氏

2003年より経済協力開発機構教育局 CELE のアナリスト。

学校安全や教育施設の質の評価や教育内容にあった設計など多くの国際プロジェクトを行う。

以前は、統計の専門家や著者そして調整役として Education at a Glance や PISA など注目を浴びる OECD の教育に関するプロジェクトに携わってきた。

オーストラリアのパーズに生まれ、中等教育の先生の資格を持ち、教育や社会科学に強い関心を持っている。

司会：

それでは、第2部を開会いたしますので、御着席ください。

ここからは、海外における学校施設づくりの動向として、経済協力開発機構教育局アナリストのハンナフォンアレフェルド様より、「未来の学校の姿と機能－未来の学習環境とは OECD / CELE の取組を通じて－」と題しまして御講演いただきます。

プロフィールにつきましては、お手元の資料を御覧ください。

それではよろしくお願いたします。

ハンナフォンアレフェルド氏：

(スライド1) 初めまして。私はパリに住んでいます。私は経済協力開発機構のアナリストをしています。私は研究者と先生と統計の専門家でした。

大臣政務官、国立教育政策研究所所長、御参加の皆様、OECD を代表いたしまして、アラスターブリスとともにこのような機会を与えられましたことを大変嬉しく思います。そして、「ふじようちえん」の素晴らしい教育施設に対する表彰式、そしてまた、海外における学校施設づくりの動向についてお話しできて大変嬉しく思います。ありがとうございます。

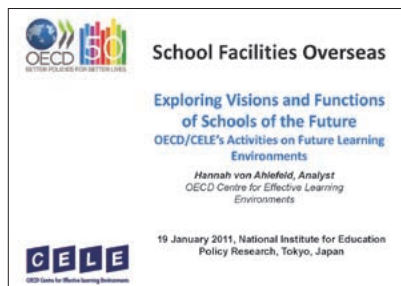
(スライド2) では、最初に OECD のことを少し説明させていただきたいと思います。

今年は特別な年なのです。なぜかと申しますと、OECD の50周年記念でありまして、1960年12月14日に OECD 条約を調印し、発足が1961年の9月でした。日本の菅首相が、最近、OECD の50周年記念に對しまして、非常に OECD が重要な役割を担ったということを発表してくださいました。すなわち世界経済の安定的発展において重要な役割を担ったということでもあります。

日本は OECD に1964年に加盟しまして、それ以来、非常に活発にさまざまなディスカッション、そして活動に参加していただきました。そして政策分析や、また、いろいろな計画、そういった OECD の成果というものを日本の経済政策に反映していただきました。

(スライド3) OECD には34の加盟国があります。また、新しく4か国が参加し、それを歓迎したいと思います。チリ、イスラエル、エストニア、スロベニアであります。

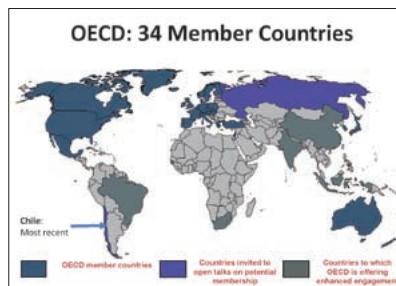
(スライド4) OECD は、各国政府が集まり、そして世界中で市場経済というものにコミットし、持続可能な経済成長を支持する、また、雇用を拡大する、そして生活水準を上げ、また財政的な安定を保



スライド 1



スライド 2



スライド 3

ち、そして他国の経済発展を支援し、また、世界貿易における成長を促す、貢献するといったことにコミットしております。

(スライド5) それではCELEのお話をしたいと思います。アラスターと私たちが関わっていることでありますが、OECDの効果的学習環境センター、CELEと呼んでおりますけれども、やはり生徒が学ぶ環境というのは極めて重要だと考えております。そして、非常に教育に対するアクセスにおいて、学ぶ空間が極めて重要であります。コミュニティに対しても、また効果的な教育のためにも、またグリーン、環境においてもそうであります。そういったことから、非常に重要な投資が最初は必要であります。それがいわゆる教育設備のライフサイクルにおいてずっと持続的に実際に支出され、それによって知識経済のニーズというものに見合っていく、そしてそれに合わせて変化していくということが重要であります。

1972年にCELEが実際に学習環境のデザインに関する革新、そして教育設備の政策に関する評価や、その実践に関する評価、そして学習環境の管理ということを行ってまいりました。

(スライド6) 12の正規のメンバー加盟国、そして14の準加盟国があります。そして20カ国以上が代表として入っております。また、国立教育政策研究所や東京工業大学も入っております。

(スライド7) 皆さん、ぜひとも我々CELEのプロジェクトやジャーナルやミーティングや会議やwebサイトを訪れていただきたい、そして参考にさせていただきたいと思っております。

(スライド8) 私のプレゼンテーションのテーマでありますけれども、皆様に対して学習環境の未来における思考の糧というものを与えることができたらと思っております。これから30分間、OECDにおきまして成功裏に開催された2010年9月のウィーンでの会議における内容について御紹介したいと思います。

OECD Mission

OECD brings together the governments of countries committed to democracy and the market economy from around the world to:

- Support sustainable economic growth
- Boost employment
- Raise living standards
- Maintain financial stability
- Assist other countries' economic development
- Contribute to growth in world trade

The OECD provides a setting where governments compare policy experiences, seek answers to common problems, identify good practice and co-ordinate domestic and international policies

スライド 4

THE OECD CENTRE FOR EFFECTIVE LEARNING ENVIRONMENTS

Mission: To assist members in improving the educational and operational effectiveness of their educational infrastructure

スライド 5

CELE Membership

- 12 OECD Member Countries
- 14 Associate Participants (includes regions and states)

Members in Japan: National Institute for Educational Policy Research, Japan Institute of Technology

スライド 6

Take part in our activities...

CELEEXCHANGE Published three times a year

The journal of the OECD Centre for Effective Learning Environments (formerly the OECD Programme on Educational Building)

www.oecd.org/edu/facilitiesjournal
Contact: carola.miraa@oecd.org

CELE Effective Learning Environments Conference
Paris, 29-30 September 2011
Contact: alastair.kby@oecd.org

www.oecd.org/edu/facilities

スライド 7

"Exploring Radical Visions for Tomorrow's Schools ... and how to make them work."

Vienna, Austria, 20-22 September 2010

Co-organised by OECD/CELE, the Austrian Federal Ministry for Education, Arts and Culture, and Vienna University of Technology

スライド 8

Summary

- How far have we come?
The evolution of learning environments
- Learning environments of the future
Three scenarios...
- Some reflections
Learning environments to support 21st century knowledge and skills

スライド 9

学校の将来、未来に関しましてラジカルなビジョンというものを探求していく、そしてどのようにしてそれを機能させるかというテーマでした。

(スライド9) 三つのテーマがあります。どのようにして各国におきまして学習環境というものの進化というものを評価するのか。そしてまた、将来、学習環境はどのようなのか。

そしてまた、学習環境に21世紀の知識やスキルというものを反映させなくてはいけないということ、こういった命題があるわけであります。

(スライド10) 孔子が言っております。真に現在を理解し、そして未来を形づくるためには、過去を理解する必要があると。どれだけの進歩を遂げてきたか、学習環境に関して過去数百年間における進歩を見る必要、理解する必要があります。

これは大学の建築物でありますけれども、この設備を見ますと、ここで学習、教育、そして学校についてのいろいろなことを学ぶことができます。

それでは、学習空間というものが過去数世紀にわたってどのように進化してきたかということを見てみたいと思います。

(スライド11) まず最初に、1670年にさかのぼってみたいと思います。これは絵画です。ヤン・ステーンですが、オランダの村の学校の様子を描いたものであります。ちょっとカオスですね。子どもたちが寝ていますし、先生たちはテーブルに立っていたり、そして先生がちょっとリラックスしているようですね。そして奥さんのほうが教えている、先生がさぼっていると。このアートヒストリアンでありますけれども、非常にシニカルにコメントしているわけであります。これが当時であったと。この当時の教育シーンはこんなものであったと。しかしながら、これはその状況を現実的にあらわしたものであります。

(スライド12) それでは時計の針を200年先に進めてみたいと思います。このスライドはドイツの1848年の村の学校であります、アルバート・アンカーの絵であります。そして男の子と女の子は別々にしっかりと分かれていますし、男の子はしっかりと最前列です。ポールポジションにいて、女の子は端ということで区別されております。先生はスティックを持っております。生徒たちを威嚇しているわけですね、最前列の男の子たちを。

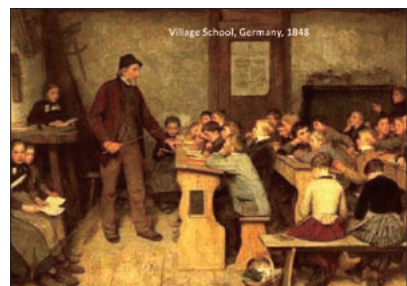
では、ここで二つの絵画の中で二つの進化、そして政治的、また産業革命といった時代の変化が見られるわけであります。産業革命というもので、2番目の絵画がどうしてこうなったかよくわかります。



スライド10



スライド11



スライド12

つまり学校というのは施設になった、すなわち子どもたちが機械文明の一部に、歯車になるための施設となったということをあらわしています。

(スライド13) 日本に目を向けてみたいと思います。日本は誇るべき教育伝統を持っております。御存じのように、日本は世界でも最古の公立学校の歴史を持っております。閑谷学校でありますけれども、これは1666年に池田光政が木谷村において学校を建てたという、1666年まで歴史がさかのぼります。

(スライド14) そして、日本におきましては、しかしながら教育というのは富裕層、またエリートクラスだけ。ただ、寺子屋に関しましては多くの農民の子どもたちも教育したわけでありまして。そして先生がここではフラストレーションを感じているようですね。非常に裕福な子どもたち、グループがあまりまじめに勉強をしていないということ。

(スライド15) 1868年に明治維新が起きました。そこで日本が世界に門戸を開きました。日本の教育制度というのは改革されました。主にヨーロッパのモデルに従ってであります。そして普遍的な義務教育ということでありまして、そういった教育制度の中におきましての階級の制度というものを廃止したわけでありまして。

そしてまた、教育勅語というのが1890年にできまして、日本の伝統的な価値を日本の教育制度の中において強化するということで補完してまいりました。

ここでごらんになってわかるように、アルバート・アンカーの絵画と非常に類似していますね。生徒たちというのが機械文明の準備をしていると。

(スライド16) 次に、1950年代の写真であります。先生も生徒もハッピーだということで、伝統的な教室の中で教育を受けているわけでありまして。1947年、教育基本法が制定され、また1947年、学校教育法がすべての学生に対して小学校6年、中学校3年、高校3年、大学4年、短期大学は2年というところで学ぶということを規定したのであります。

(スライド17) それから60年たった今日、OECDが2010年にレポートを発行したわけですが、日本の最近の結果を見ますと、例えばOECDの国際的な学生評価プログラムを見ても見ますならば、そこではエクセレンスというものが語られております。しかし、日本、エチオピア、米国、英国、デンマークからのこれらの写真をごらんください。いずれの写真もいわば伝統的なクラスというところで、先生が教えるという形での教授法であります。学習環境というのはどの国においても極めて類似しているものであり、この1世紀において、どうもほとんど変わっていないようであります。



スライド13



スライド14



スライド15

(スライド18) それでは、ここにおける設問ではありますが、21世紀、学習する者にとっての適切な学習環境というものとはどんなものであろうかということでもあります。このような環境というのは、学生が自分たちが知識経済において生き延びるためのスキルを会得することができ得るのでしょうか。私にとっては良かったわけです。それはもう25年前のことでもあります。

そしてさっき私の言った学校の写真であります。私は言われたことを受け入れて、そして本当に理解しなかったけれども、計算の仕方を教えて、メモをとって、それを正確にまた短時間において、そして既に習った情報を引き出して、長い時間じっと座っているということを学んだわけです。こういったことを学んだわけですが、果たして21世紀において、これらスキルを得るに当たって正しい環境と正しいものを会得しているのです。

(スライド19) アメリカのコンピュータ学者アラン・ケイいわく、将来を予測する一番いい方法は将来を發明することだということでもあります。

ここで幾つか、将来あり得るシナリオということで、三つほど御紹介したいと思います。2020年までということで、OECDのCELEが生み出したものであります。これらのシナリオというのは、現状を維持する試み、再学習、そして脱学校というものであります。

(スライド20) それでは、最初のシナリオということですが、変化する世界の中で、そこでは現在の制度がそのまま続行するというシナリオを想像してください。

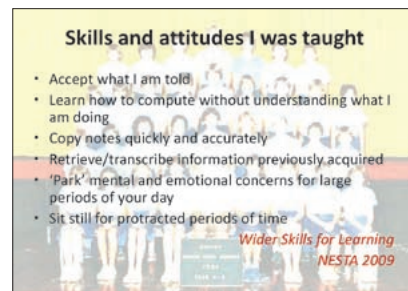
(スライド21) 一つのその中のサブシナリオにおいて、既存の制度といったものが将来においても持続するということでもあります。それは、例えば変化に対する傾向、あるいは国民の選択ゆえであります。また同時に、学校への資金が大幅に増大することはないにもかかわらず、学校での資金需要は大きくなっているのです。ICTはどんどん発達しているにもかかわらず、学校の主たる組織は変わって



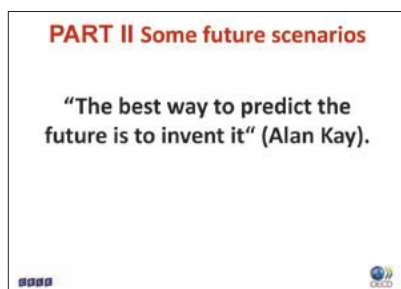
スライド16



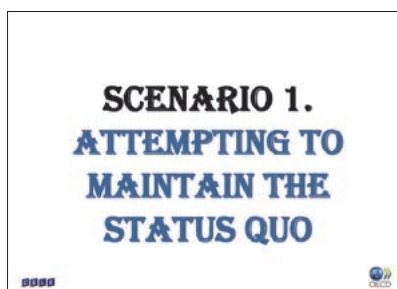
スライド17



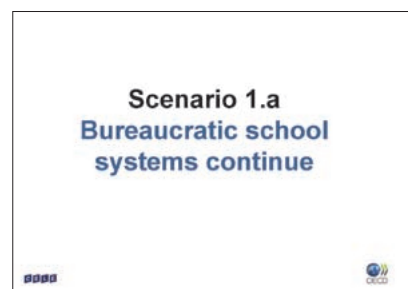
スライド18



スライド19



スライド20



スライド21

ないということでもあります。こういったアプローチというのは決して革新的な学校設計をもたらすものではないし、今までの授業、またクラスといったものに対してチャレンジするものではございません。

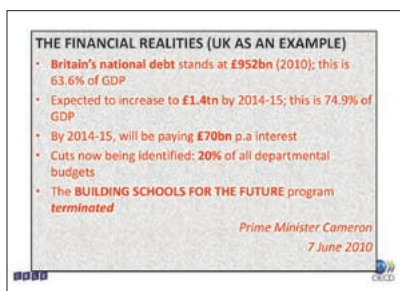
(スライド22) 世界金融危機の中において、また同時に、より高い質の学習環境を提供するということが要求されているにもかかわらず、多くの諸国においては公的支出というのが大幅に削減されているのであります。

そして、今ごらんになっていただいているのは、英国の国債、あるいは債務が極めて膨大なる金額に及んでいるということを示しているのであります。

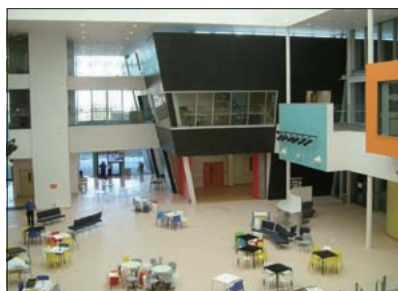
(スライド23) これは学習のためのフェールウッドセンターであります。英国の将来プログラムの学校建築といった一環でなされたのであり、世界で最も規模の大きい学校の建物であります。学生数は1,300人ということで、地域社会の中心に学校を設置したわけであります。しかし、2010年になりますと、政府としてはこの極めて印象的な10億ポンドプログラムを中止することを発表したわけであります。そして700校ほどがこのプログラムに参加したいと言ったにもかかわらず、実行されないということでもあります。また、100のアカデミーの学校は、ケース・バイ・ケースで実行するかどうか見直されるということになってしまったのであります。

(スライド24) もう一つのサブシナリオというのは、メルトダウンシナリオと呼ばれるものであります。そこには先生不足というのも、先生方が高齢化するということが、また同時に、いわば先生ばかりが残ってしまうということでもあります。そして、こういったことは多くの諸国において見られているのであります。

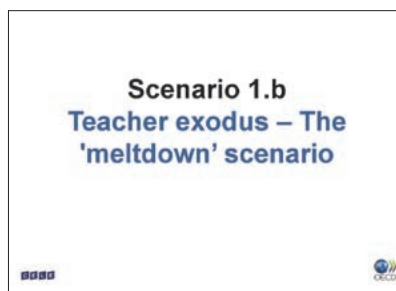
(スライド25) それに対応して、政府としては先生の給料を引き上げて、また同時に、そうしますと、例えばICT、あるいは建物への投資の資金が先生の給料のほうに回ってしまうということでもあります。



スライド22



スライド23



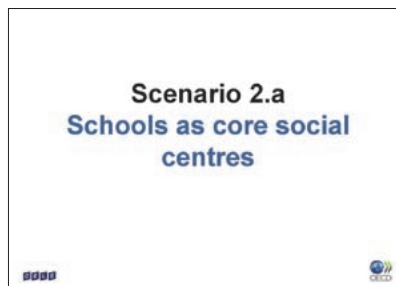
スライド24



スライド25



スライド26



スライド27

(スライド26) もう少しいいシナリオとして、再学校化というのを見てみましょう。かなり規模の大きな投資があると同時に、それによってメリットがあるということでもあります。

(スライド27) まず最初のサブシナリオというのは、地域社会において学校に焦点をあてるということでもあります。教育に対する責任は学校と地域社会、そして地元、そしてまた、さらなる継続教育の諸機関で共有化されるというものであります。

(スライド28) いわば学習の場というのは必ずしも学校である必要はないということでもあります。地域社会のどんな建物も潜在的には学習でき得る場だということですので、地域のセンターであろうと、公立の建物であろうと、レジャーセンターであろうと、公園であろうと、その他地域の空間といったものがいわば地域の教育プログラムの実施の場として使い得るという考え方です。

(スライド29) また、情報と通信技術というものが確かに大事であります、地域社会のリーダー、また社会の参加というのが、地域の教育プログラムの成功のカギを担っているということがいえましよう。

(スライド30) 少子化というのがほとんどの諸国において見られる今日、日本も例外ではない。学校が閉鎖される等、あるいは学校を別の目的に使うということになっているのであります。こういった中においては、クリエイティブな設計が必要であり、地域社会ベースのアプローチが必要だということになります。

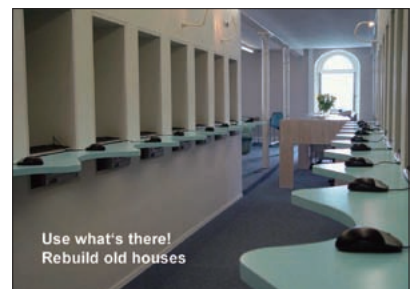
(スライド31) これはスイスにおいて税関当局が使っている施設として、もと学校だったものであります。また、スイスにおいて、これはオフィスビルですが、ただ単に既存の設備というものを再利用するという良き例であるのみならず、また、学生にとっていわば現実的な、革新的なオフィスのような作業環境を与えているということになっております。



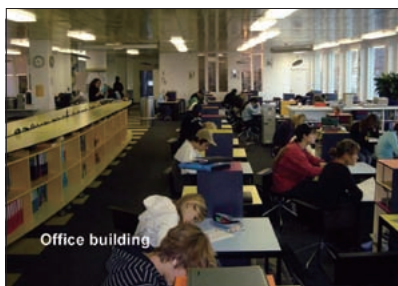
スライド28



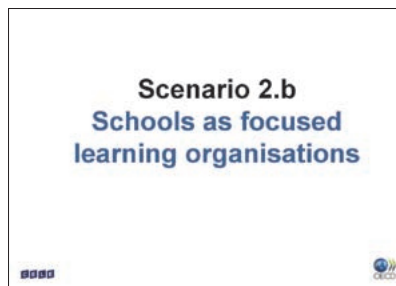
スライド29



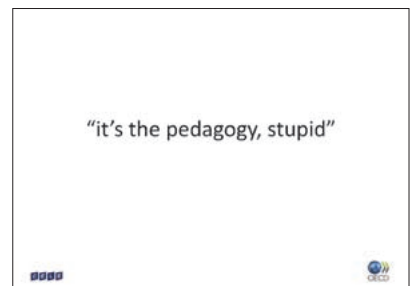
スライド30



スライド31



スライド32



スライド33

(スライド32) もう一つのサブシナリオにおいて、学校というのがいわば知識ということ重視しているのであって、必ずしもソーシャルアジェンダが重視されているわけではありません。

(スライド33) ここでは、先生はあくまでも学習のファシリテーターであって、一方的に指示する形をとっていません。先生たちは自分たちの持つさまざまな専門知識を駆使して、ここの学習者のニーズにこたえるべく訓練されています。ワークショップ、レクチャー、実習、仮想学習、いろいろな形態が考えられます。

(スライド34) 学習環境の種類というのは、あくまでも個々の学習のニーズにこたえるということ、これは私の私見になるかもしれませんが、柔軟性のあるオープンプランソリューションと呼びたいと考えています。クンスカップスコラン・セカンダリースクール、これはスウェーデンの例でございますけれども、ここではパーソナルコーチングが重要なカギを握っています。ここには22の学校が参加をしています。ここには一切廊下はありません。すべてのスペースはすべて学習のスペースになり得ます。空のスペースがワークステーションに変わります。そして学生たちはこのポータルにログインし、そしてクラスの外でも学習を続けることができます。オープンスペース、そして可視化、そしてさまざまな複数のスペースが教育プログラムの中で重要な役割を果たしています。

(スライド35) さて、日本をはじめとしてそのほかの国々におきまして、ここにきてもう一度オープンプランソリューションを導入しようという機運が見られます。1970年代にこれが導入されましたが、失敗しました。しかし、教育者、そしてデザイナーが、今は協力しながら、使えるオープンスペースをつくらうとしています。将来の学校のヒントがここにあるかもしれないと私どもは考えています。

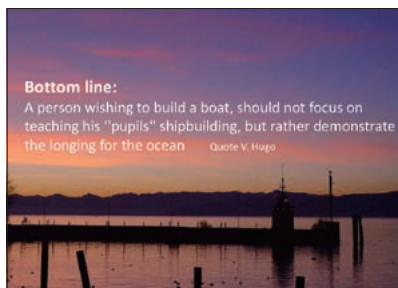
さて、このシナリオにおきましては、抜本的な変化というものがティーチングプランにおいて発生しなければなりません。先生はファシリテーターになるということです。これはビクトリー・ヒューゴの言葉なのですが、船をつくりたいと思っている人に造船術を教えてもだめだと。海を愛することを教えるべきだとビクトリー・ヒューゴは言っています。

(スライド36) 私ども、「ふじようちえん」を昨日訪問させていただきました。そのとき、本当に学校側がすばらしい強いリーダーシップを発揮しながら、そしてそこにデザインイノベーションをうまく組み合わせることによって、将来の教育の抜本的な変革につながると改めて思いました。

(スライド37) 最後に、ノースクールというシナリオを説明申し上げたいと思います。このシナリオにおきましては、学校そのものは存在しません。ということは、皆様方の多くが職を失うということに



スライド34



スライド35



スライド36

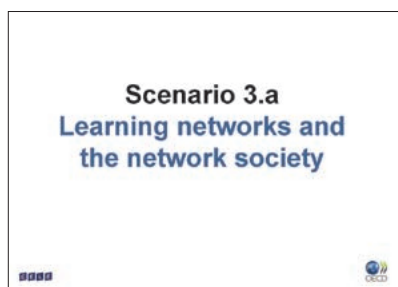
なるかもしれませんが、ノースクールの考え方の一つとして、すべて仮想化されます。学生はあくまでも教育プログラムに対しまして、どこにいても、いつでもアクセスをし、そして学習者のアドホックグループを作っていくということになります。すなわち人の創造性をベースにして、それがインターフェイスになるということです。ネットワーク社会におきましては、高度化されたクラスにおける学習形態というものは過去の遺物ということになります。

(スライド38) さて、一つ素晴らしい例を御紹介申し上げたいと思います。これはニューヨークの学校です。クエスト・トゥ・ラーンという名前がありまして、ゲームのような学習効果を期待しています。21世紀リテラシーという表現でも呼ばれています。この学校のゴールというのは、あくまでも子どもたちのニーズにきちんとこたえるということ、しかもデジタル時代に住んでいるたくさんの情報にアクセスができる、非常に複雑な世界に住んでいる幼児のニーズにこたえるということが一つの重要な目的になっています。オンラインリソースで学習することができます。すべての学習というのは四つのカリキュラムの領域に分けます。物事の機能の仕方、存在、空間、場所、高度の世界、そして心のスポーツ、そしてウェルネスでございます。

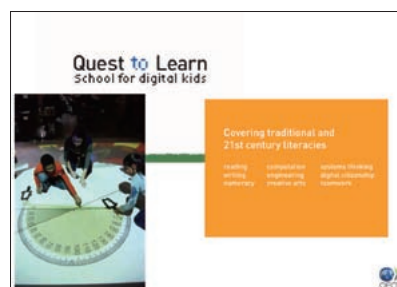
(スライド39) 各カリキュラムの領域が、二つまたはそれ以上のテーマと一緒にになります。例えば数学と科学と一緒にになります。例えば一つのドメインに、心のスポーツ、スポーツ・フォー・ザ・リマインがメディア・アートとゲーム・デザインと一緒にになるわけです。すなわちゲーム・デザインのプラットフォームの6年の生徒と7年生のプログラミングの学生と一緒に8年生の世界の人たちと協力しながら、臨場感あふれる環境の中で学習を進めることができるという事例でございました。

(スライド40) さて、最後のサブシナリオでございますが、これはいわゆる拡張マーケットモデルと呼ばれるものでございます。雇用者、消費者、そしてそのほか学校関係者の間でいろいろな不満が生まれています。こうした不満に対して、いかにこの閉塞感を打開することができるかということが一つ重要になっています。カスタム化されたラーニングがキーワードになります。非常に創造性が要求される分野でもございます。

(スライド41) さて、オープンユニバーシティを一つの例として御紹介申し上げたいと思いますが、特にイギリスの高等教育におきまして大きく最近変わっています。1971年にコミュニケーションのテクノロジーがより高い教育、学習の機会を、これまで教育の機会を持つことができなかった人たちに提供することができるのだという信念のもとにスタートしました。すなわち、いわゆる正式な入学試験はあ



スライド37



スライド38



スライド39

りませんが、それでも200万人以上の人たちに教育を提供し、そのうち67万5,000人の人たちは十分な資格を持っているということが実際にアセスメントで証明されています。

(スライド42)以上、さまざまな三つの可能性のあるシナリオについて御紹介申し上げました。しかし、未来はどのようになるのかまだわかりません。

そこで、もう一つ別の角度で物事を見てみたいと思います。

21世紀において、どのようなスキルが、どのような姿勢が学習者に対して要求されているのか、それをサポートするにはどのような環境が必要なのかという視点で物事を見てみたいと思います。

(スライド43) 2、3年前に、シスコは21世紀枠組みというものを導入いたしました。そこには三つの根本的なスキルセット、21世紀の学習者のためのスキルセットが説明されています。コアテーマ、21世紀のテーマというものがそこでは重要な側面になっています。

(スライド44) まずはコアサブジェクト、テーマでございますけれども、例えば読み書き、リーディング、そして外国語、アート、地理。21世紀のテーマとしては、グローバル・アウェアネス、金融、経済、ビジネス、そしてアントレプレニューリアル・リテラシーになっています。

(スライド45) スキルのほうでございますけれども、三つございまして、詳細はこちらでございますので、ぜひ参考にしていただきたいと思います。ラーニング・アンド・イノベーション・スキル、情報、メディア、テクノロジー・スキル、そしてライフとキャリア・スキルでございます。

(スライド46) さて、先ほどプレゼンテーションの冒頭に紹介したスキルとはかなり違うと思います。20年、25年前のスキルとはかなり違っているわけでございます。いかがでしょうか、こうした21世紀の学生に対して必要とされるスキルまたは姿勢というものが、そうだとすることで合意できるということであれば、これまでの伝統的な学習環境というもののはやはり変えるタイミングに来ていると考えていい



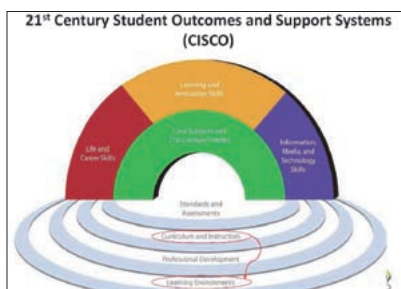
スライド40



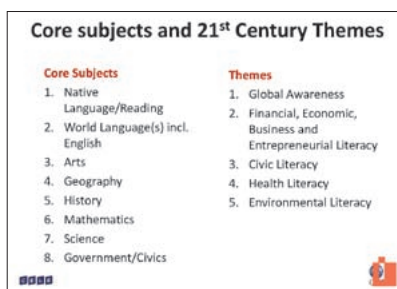
スライド41



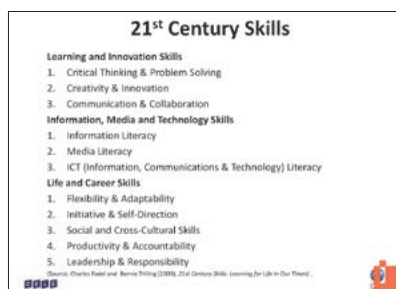
スライド42



スライド43



スライド44



スライド45

と思います。

(スライド47) すなわち、将来の学習環境というのは、コネクティビティというものをサポートしていかなければいけません。シスコの同僚の方々はこの点を十分理解しています。バーチャルホールにおけるアバターという言葉、また、バーチャル・テレプレゼンスという言葉もよく彼らは使っています。ホワイトボード、そしてテレプレゼンス、バーチャル、こうした環境の中での通信、または通信をベースにした学習環境というものがシスコの方々によって今プッシュされるような時代背景になりました。

(スライド48) さて、学習環境というのは、環境、そして地球規模の認識というものをサポートしていかなければいけません。

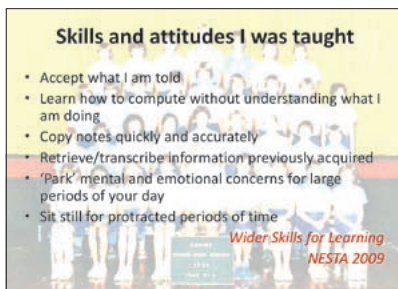
(スライド49) そして、この学習環境というのは、いつでもどこでも、古い建物をリサイクルしながら、そして学校をあくまでもコミュニティに持ってくるという形でサポートしていかなければいけないと思います。逆であってはいけないと思います。

(スライド50) また、学習環境というのは、必ずやラーニング・コミュニティの全体をサポートするという、そのために強力なパートナーシップを地元のリーダー、学校の関係者、またそのほかのローカルプレイヤー、また、特に重要なのはデザイナーの方々をきちんとネットワークを組んでサポートしていくということ、その最高の例が「ふじようちえん」であると思います。

どうもありがとうございました。(拍手)

司会：

ハンナフォンアレフェルド様、どうもありがとうございました。



スライド46



スライド47



スライド48



スライド49



スライド50



スライド51

記念講演



海外における 学校施設づくりの動向

海外の先進事例の紹介
—OECD/CELE

学校施設好事例集を通じて—

アラスター ブリス 氏

経済協力開発機構教育局アナリスト

アラスター ブリス 氏

経済協力開発機構教育局 CELE のアナリスト。

より良い教育環境のための設計について調査研究を行う。

現在は、高等教育施設に関するものや教育研究活動に必要な条件、環境に配慮した教育のための学校施設について調査研究等を行っている。

イギリスの建築家。王立英国建築家協会のメンバー。2007年8月より OECD に所属。

ウェストミンスター大学において、高等教育施設の性能評価に関する研究に従事。

司会：

それでは、続きまして「海外における学校施設づくりの動向」として、経済協力開発機構教育局アナリストのアラスター ブリス様より「海外の先進事例の紹介－ OECD / CELE 学校施設好事例集を通じて」と題しまして御講演いただきます。

プロフィールにつきましては、お手元の資料を御覧ください。

よろしくお願いいたします。

アラスター ブリス氏：

(スライド1) ありがとうございます。

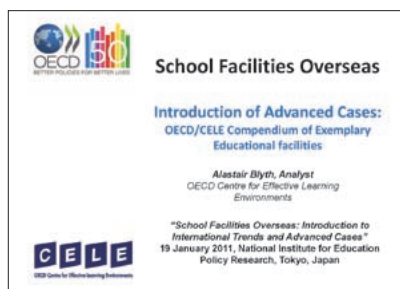
それでは、これから学校施設好事例集に関してお話をしたいと思います。

(スライド2) どのようにして好事例集の出版に当たってすぐれた事例を集めてきたかということ、また、どういったクライテリアを使って選出してきたのかというようなこととお話ししたいと思います。

「ふじようちえん」に関しましては、もう既に表彰されたとおり、非常にすぐれた学校施設として選出されたわけであります。

(スライド3) この好事例集というものを出版してまいりました。90年代の中旬から、教育設備に対して、効果的学習環境センターのほうではさまざまな事例というのを出版し、今回は4版目ですけれども、第1版に関しましては96年、そして2001年に第2版、そして2006年に第3版、第4版が今年の後半に出版されます。

(スライド4) この目的というのは、単に教育設備の中で最高のものを選ぶというだけではなく、(スライド5-6) 教育空間というもののデザインということに関してどのように進歩してきたかということを見ていくわけであります。そして、教育者や学校のリーダーや教育にかかわる人たちに対して、どの



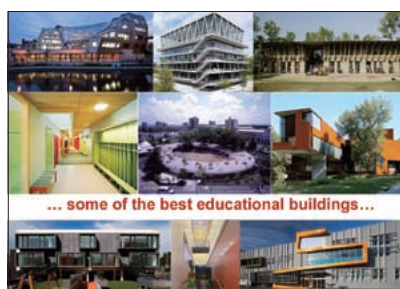
スライド 1



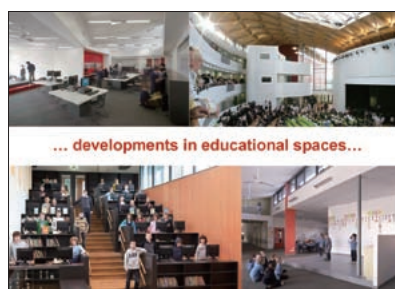
スライド 2



スライド 3



スライド 4



スライド 5



スライド 6

ように教育空間というものをさまざまな多様な形で活用し、それによって教育と学習、両方の効果を最大限に上げることができるのかということ、そして、そのためには教育空間のさまざまな教育ニーズに見合うためのデザインが必要になってきます。

(スライド7) そして、2011年9月に第4版が出版される予定でありますけれども、後ほどまたこのことをもう少し言及したいと思います。

まず、応募というものをかけたわけでありまして、OECD加盟国に対して行いまして、このプロセスは2009年にスタートしております。そして、ここで実際に非OECD加盟国に対しても、教育建築物として好事例、最適な事例というものを挙げてほしいということで応募を募ったわけでありまして、候補の推薦を依頼しました。

(スライド8) そして、就学前教育、つまり幼稚園、保育園から高等教育までということを対象にしました。

(スライド9) ここでの好事例ということに関しましては、少なくとも四つの基本的なクライテリアに見合う必要があります。革新的なデザイン、そして目的にかなった設備である、そして持続可能性と安全性であります。

(スライド10) 全部で33カ国166件、これはOECD非加盟国も含めて応募を得ることができました。これまでの中で最高の数の件数でありました。

(スライド11) そして、この応募に関しましてブレイクダウンしてみました。すなわち基準に関してですけれども、基準に分けてブレイクダウンしました。ここで強調したいのは、ここにある数字ですけれども、これは基本的なクライテリアでありまして、それに基づいてそれぞれのプロジェクトを実際に応募したわけでありまして、そして、少なくともほかにも二つ三つぐらい追加のクライテリアがあったわ



スライド7



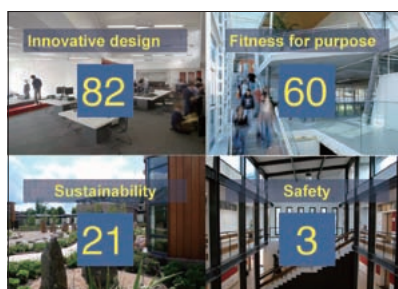
スライド8



スライド9



スライド10



スライド11



スライド12

けです。82のサブミッションがありまして、これは革新的なデザイン、60に関しましては目的に合致している、21の応募は持続可能性、そして3件が安全性に関しするものでありました。これは安全性とか持続可能性があまり重要ではないということは意味しないわけです。たまたまそのカテゴリーで応募した事例というものを選ばなかったということだけであります。

(スライド12) そして、審査委員会は6名により形成されておりまして、すぐれた作品として6件を選定しました。ここで非常に重要な好事例に匹敵するということで6件が選ばれたわけであります。

(スライド13) 60件が28か国から選出されまして、それが好事例集第4版において掲載されます。

(スライド14) そして、第4版は今年9月に出版されます。そして9月末に CELE の運営委員会が9月29日から30日まで、パリで開催されるわけでありましてけれども、そこで発表されるということでもあります。

(スライド15) そして、ここで四つの主要なセクション、選出基準についてお話ししたいと思います。また、ここで教育デザインというものの方向性を皆さんに知っていただくためにも有益かと思うので、御説明させていただきます。

(スライド16) 一つ目のクライテリア、基準は、革新的なデザインであります。それはどういう意味かということ、教育設備というのは、目的とされた当初の教育目的というものに見合うだけではなく、学習環境の質を常に向上させ、そしてコミュニティに対しても責任を持ち、そして ICT とか技術とか、コミュニティのニーズに見合うということ、そして学習環境をそういった意味で整えていくということ、そして教育のニーズや需要というものを未来に向かって満たしていくということが重要であります。これが革新的なデザインです。

(スライド17) それから、さまざまな応募を見てみますと、いろいろな特徴がありました。デザイン



スライド13



スライド14



スライド15



スライド16



スライド17



スライド18

というのは、実際、いろいろな場合、いわゆるコミュニティの感覚というものを学校の中で助長するという、すなわち地域のコミュニティとの深い関わり、エンゲージだけではなく、学校のすべての人たちがすべてのコミュニティの活動に参画する、そしてエンゲージメントでありますけれども、積極的なかわり、オブザーバーということもあるかもしれませんけれども、マーロー・アカデミー、英国の例でありますけれども、これは非常に簡単にこれを見ただけでも、主要な巡回ルート、サーキュレーションルートのバルコニーをつくることによって、いろいろなアクティビティエリアを見ることができる。ここではガラスでできましたスクリーンを使っているわけでありまして、学校の中で、あるいは教室の中で、そしていろいろなアクティビティスペースで何が起きているかということが直接見えるということ、透明性を持つということ、それによってこのようにリンクするという、そして可視性というものを持つ。ですから、そういったことから学校のすべてのアクティビティに関して可視性を保つことでもあります。

(スライド18) 学習アクティビティというのは、すなわち分厚い壁に囲まれて隠されたものであってはいけないということでもあります。また、学校施設に関して、ローカルコミュニティとの積極的なかわりが非常に重要であると。ですから、学校の中で何が起きているか見えるようにするということが重要になります。中に入らなくても外から見えるということ、そういった透明性が必要であります。ですから、学習の活動というものが外からも見える、そしてコミュニティのメンバーがいつも学校を訪問するわけにいかないわけですけれども、しかし、それが訪問しなくても見えるようにするということがあります。

(スライド19) そして、個人個人に焦点を当てたパーソナライズド学習、そしてカスタマイズした学習ということが非常に重要でありまして、ここではさまざまな多様な生徒のニーズに見合っている行きます。そして、さまざまな学習空間というものは、それに準じて提供される必要があります。そして、いろいろな学習、そして教育スタイルが生まれております。

これはオーストラリアにありますビクトリアのダンデノンの学校でありますけれども、ここには三つのスクールが、2,000人以上の学生なのですけれども、これを全部組み合わせて、ここで再生プロジェクトとして立ち上がったわけです。七つのビルでありまして、それぞれ300人ずつの学生を取用することができる。

(スライド20) そして各ビルにおきましては、ここではコア学習というものは共通のもの、そして、



スライド19



スライド20



スライド21

ここで学生たち、生徒たちというのは、みんな内包されている、そして生徒たちが指導権を持っているオーナーシップの感覚、そしてインクルージョン、この感覚が非常に重要であります。そしてプライベートスペース感覚であり、そしてそこでさまざまな多様な学習スタイルというものを取用することができるということです。

そして、学校は非常に強いリーダーシップというものが校長先生の指導のもとに整備されておりまして、生徒、学生、デザイナーのインターアクションが活発であります。当事者全員がかかわるといふこと、そしてそれによってオープンに需要に見合っていく、コミュニケーションする、「ふじようちえん」もそれに類似していると思います。

(スライド21) これは近代的な教育、そして訓練施設であります。これはバングラディッシュのルドラプア村にあります中学校ですけれども、ここでは学校教育の場だけではなく、コミュニティが使うことができるということです。そして、ここでは非常に重要なイベントというものを持つことができます。

建物の建設をすることによって、建設労働者がみずから学習の場として、例えば土や竹を使うのを学ぶ場となったのであります。そして、建築技法としてもあえて選ばれたのは、その他地域社会での住宅及びその他の施設において活用できるような技法が採用されたのであります。

(スライド22) 学校の理念というのは、喜びを持って学習するということでありまして。プランは極めて単純であり、地上階においては洞穴のような部屋というものが主たるクラスの隣に置くことによって、この洞穴の中でより小さなグループで勉強したり遊んだりできるということでありまして。

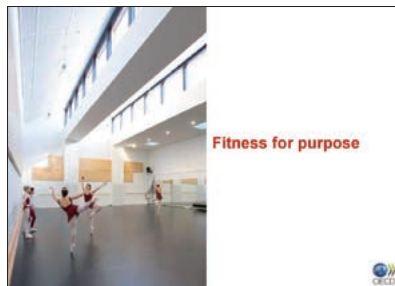
また同時に、建設工程において、学生がいわば持続可能な建設は何かということをおぼ場とも兼ね合っただけであります。

(スライド23) 次に、目的にかなうということでありまして。目的にかなうというために、学校の施設というのは、今日の教育ニーズにこたえるのみならず、もう一つ、学習集団としてフレキシブルかつ包括的でなくてはなりません。また同時に、投資、また学校運営の効率といったものを最適化するものでなくてはなりません。

(スライド24) これはビクトリアン・カレッジ・オブ・ザ・アーツ・セカンダリー・スクールということですが、ここでの学生は、これからさらに、例えばいろいろな芸術を高等教育で勉強する人たちが行くところでありまして。ここでの教育の戦略というのは、例えば教育を行うと同時に、いわばパフォーマンスと一致して、いろいろな芸術活動に従事できるように教えていくということでありまして。ただ単



スライド22



スライド23



スライド24

に伝統的なクラスで教えるということではなく、もっと双方向の、また、ともに学習する場となっているのであります。また、学校としては、地域社会が活用することもできると同時に、大きなパフォーマンスの場として使うことができるのであります。

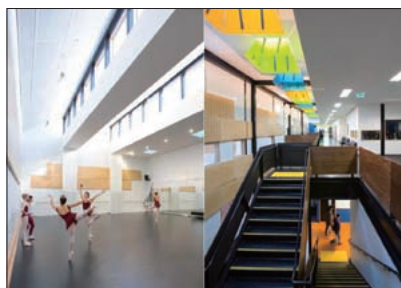
(スライド25) こういった都市の中での学校というのはいろいろな問題がございます。例えば近くの道路が渋滞して騒音が激しかったり、大気汚染であったりということで、建物そのものは機械的に空調していかななくてはならないということですので、必ずしも窓をあけたりということで自然換気ができる環境でないところもございましょう。

(スライド26) 持続可能性というのは、持続可能な建設資材及び技術を使うことによって環境への負荷を削減し、また、CO2の排出を削減していくということでもあります。設計としては、学校をただ単に伝統的な学習の場として使うのではなく、もっと広く環境教育を促進する場としても活用するということがあります。

(スライド27) 英国にありますウォーターホール小学校というのは、ただ単に環境基準がかなり厳しいものを満たした、例えば風力発電することによって電力を発電する、また、雨水を収集し、またリサイクルをするというようなことをいたしておりますが、これは今や一般的にいろいろな場において活用されていることで、それほど目新しいことではないかもしれません。しかし、一つそこで大事なものは、いわば環境勉強をできる場としてつくったということでもあります。子どもたちや学生が自分たちの地元の環境を勉強する場として位置づけられたのであります。この建物においては、建物そのものを第3の先生として使っていくと。もちろん学校の先生、そして親が先生になる、また建物が先生となるという、三つ目の先生であります。これが物理的な学習の環境として活用でき得るということで、教材として活用できるのであります。

OECDのPISA報告書、グリーン・アット・フィフティーンといったものが2年前に刊行されましたけれども、ここでは学校といったものが、いわば環境に関して学ぶ場としていかに重要であるかということに焦点を当てております。また同時に、そこでは物理的な環境がそこでの役割を果たすということを示しております。

(スライド28) 次に、ニュージーランドのスネルズ・ビーチ小学校、これもまた教材として自然と環境を使うということで、例えば鳥の生息などを勉強するのであります。あわせて、そこには果樹園や庭があるということで、学生のほうが庭や、また果樹園の設計にもかかわったということで、双方向の環境



スライド25



スライド26



スライド27

として作り上げたものであります。

(スライド29) また、動物といったものもある極端な形で活用することができ得るわけであります。ドイツにおける中等学校において、屋上に草を生やして、そこで牛が育っているということであります。搾乳するかどうかまでは聞いておりませんが、しかし、どういう形で、例えば牛が何頭もいたならば、建築家の方々は屋根にかかる負荷を考えなくてはいけないということになりましょう。

(スライド30) もう一つ、ポルトガルにおける持続可能性の事例であります。40年前の古い建物を近代化、また改修したというものであります。ポルトガルというのは、改修、また近代化プログラムをこの3年間、中等教育機関において行ってきたのであります。中学校というのはメンテが悪くて、かなり環境が悪くなった。そして今や教育ニーズにこたえないというものが出てきたからであります。

多くの諸国における政策問題としては、古い建物で、もはや今日の教育ニーズを満たさないものをどうすべきであるかということであります。このポルトガルの中学校の改修工事において、そこでは改修を既存の建物そのものに関して行うということであります。

英国において、将来計画といったものが学校に関してはあったわけですが、主にイングランド地方においては、新しく建物をつくるという発想でありました。これから人口動態が変わるということになりますと、もはや必要でない学校も出てくるわけです。そうなると、私どもとしては教育を支持するにもかわらず、ほかの目的にかなうような施設をどういうふうにつくるかということであります。

(スライド31) ポルトガルにおいてのこの学校、エヴォラというところでありますが、これが一つの事例として活用され、いろいろな技法がそこで試みられたわけであります。

その一つというのが地熱を使うということで、例えば安定した温度を保ち、そしてそういったものを空調し、そして天窓の下の階段のところに入れていくということであります。そうすることによって、暑い夏であったとしても涼しい環境が提供されたということで、かつエネルギーの使用量を大幅に削減することができ得たのであります。

ですので、建物としても、こういった学校というものは1つのデモンストレーションプロジェクトとして、ある特定の技法を示す場として示すことができ得るのであり、成功したならば、そのプログラムをほかの学校にも転用できるということになっていきます。

もちろんこの学校においても安全性を重視した事例でもあったわけであります。安全性ということで私どもの注意が喚起されたわけでありますが、そこでの基準としてどんなものがあるかといいますと、



スライド28



スライド29



スライド30

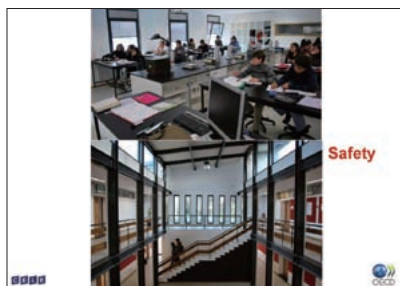
例えば天災時における安全性、また同時に、火災とか、あるいはその他洪水からの安全性というものを見ていったのであります。また、例えば子どもたちが交通事故に巻き込まれないようにということ、また、学校でのいじめを防ぐような環境を提供したいということでありました。また、耐震設計すると、特にポルトガルのこの辺は地震も多いので、耐震設計にしていこうということは極めて重要であり、それによって、例えばこの建物の構造といったものを補強することが重要でありました。下の写真でござんいただけるように、鉄を使って構造体といったものを補強したわけでありました。

(スライド32) ということで、幾つか基準を御紹介したわけですが、これからどういったことが審判、あるいは審査団によって言われたかということを御説明していきたいと思っております。

その中で一番大事なコメントの一つとしては最後のほうに申したいと思っておりますが、その前にほかのものを幾つか御紹介したいと思います。いずれも興味深い意見だということで、皆様方にとっても興味のそそられるものだと思っております。

(スライド33) まずこちらで御紹介申し上げたいのは、アイオワ大学のスクール・オブ・アーツでございまして、これはパブリック・ユニバーシティでございまして、プライベートファンドでございまして、あくまでも公共ファンド、政府のお金を使って建てたものでございまして、ここで特徴としてありますのは、キャンパス、幾つか入り口があるのですが、その一部にプレゼンスというファクターを強調しております。すなわち場所の感覚をここで強調しております。オレンジ、それから茶色の材料を使っていますが、鉄の耐候性をきちんとアピールしたものになっています。(スライド34) アートライブラリーとかスタジオ、教室、それから展示のギャラリーからメディアシアター、ペインティング、デザインスタジオ、メタルショップもあります。オフィスもあるわけですが、さまざまな機能というものがございますように一つの建物の中に組み合わせられております。

アトリウムが左側のほうに見られると思っておりますが、実はこのアトリウムによって非常にドラマチックな階段の効果が生まれています。ここでもやはりオープン性というもの強調されていると思っております。他の建物にも見られるものでございまして、この階段が人々の間で関係というのに非常に重要な役割を果たしています。階段で人と人が会って話をする事ができます。人が自由に行き来することができるように、そしてそこで自由に人々の考え方、アイデアというものが流れるように、すなわち大学としては、知識の交換というところをぜひこうしたエレメントで強調したいということであったと思っております。



スライド31



スライド32



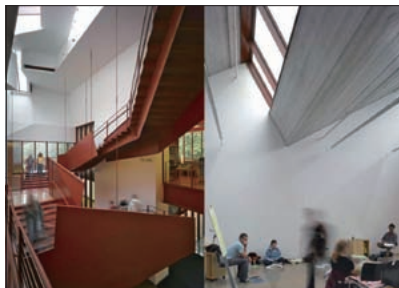
スライド33

(スライド35) 2番目の事例を御紹介申し上げたいと思いますが、これはチリのリシオ・テクニコ・プロフェッショナル・ラ・フロリダというチリにありますサンティアゴの学校でございます。この学校ですが、900のロウワー、アッパーセカンダリー、そして職業訓練の学生で構成されておりまして、いろいろな目的があったのですが、この事例におきましては、コミュニティの中における施設、質の高い教育を提供する施設だということをぜひ強調したいという特徴を持っています。いかに教育の質が重要であるのかということがここには特に強調されています。

建物の左側のほうですが、こちらのほうはスポーツのエリアでございまして、右のほうは実際にさまざまな教室をはじめとしたラーニングスペースが導入されています。(スライド36)真ん中にコートヤードが見られますが、このコートヤードを中心として、実はランプが徐々にアトリウムの中庭のほうにスパイラルの形状で入っていきます。これが教室に対するアクセス感というものを非常に効果的に醸し出していると思います。あくまでもここが中心として、このアトリウムを効果的に使おうという設計上の意図がここにも見られますし、また、教室とアトリウム、そしてそのほかの構造物の間の透明性ということもここではうまく発揮できると思います。さまざまな学習の活動に生徒たちが積極的に参加するという意識がございまして。

(スライド37) 次はベータ・ボン・スートナー・スクールでございまして、これはオーストリアの例でございます。こちらは障害を持った子どもたちの学校でございまして、50人のフルタイム、100人のパートタイムのプライマリーとセカンダリーの学生で構成されていますが、やはりここではトランスペアレンシー、透明性というものが重要なカギを握っています。

障害があるからといって教育に対するアクセスが阻害されてはいけないということであるわけですが、(スライド38) 例えばスポーツのギャラリーでございまして、今実際に何が起きているのか、



スライド34



スライド35



スライド36



スライド37



スライド38



スライド39

それをきちんと見ることができる、また、下にいる人たちも、自分の障害に対してコンプレックスを持つ必要がないというところがねらいになっています。

ここでも建物の中で、今何が起きているのか、何があるのか、それをきちんと目視できることによって、自分自身を鼓舞する、学習したいという意識を盛り立てるという効果があるとされています。

(スライド39) 次はメキシコのテクノジコ・デ・ステラパパという例でございませけれども、こちらのほうは比較的障害を持っている人たちのために特に設計された施設でございませけれども、いろいろな特徴がございませけれども、特に表面のテクスチャー、ここが特徴ですし、それから植物、水というさまざまな要旨を駆使して、さわる感覚、音の感覚、においの感覚、これを特に強調しております、全員が環境に対してきちんとアクセスが持てるのだということがデザイン上の特徴になっています。多くのプロジェクトを見ますと、やはりこれは共通のテーマになっていると思います。

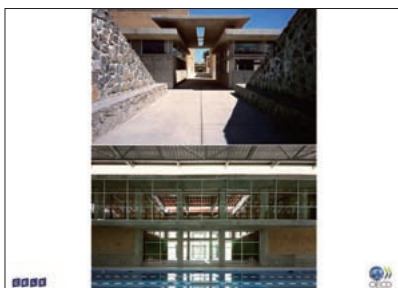
(スライド40) これはメキシコの事例であるのでございませますが、ここではスイミングプールとシアターがあります。もちろん教室もあるわけですが、実はメキシコの郊外におきまして、こうしたタイプの建物をつくるというのは非常にまれでございませ、かなりの投資になっていると思います。

(スライド41) 今回、審査員の間で、西アフリカのダノ・ブルキナ・ファッソも選んでおりますけれども、サステイナブルラーニング環境、持続できる学習環境、ここでは150人のセカンダリースクールの学生が勉強しています。

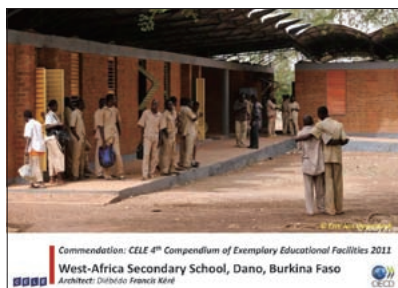
幾つかおもしろい特徴を見ることができると思います。まず申し上げたいのは、こちらはあくまでも地元の材料をつくったということ。地元の人たちをワーカーとして使っています。実際に建設のスキルを、実は前のスクールプロジェクトがございませ、実は近くで別のプロジェクトがあったのですが、そこで学習した建設のスキルをここでいかに発揮できたという喜ばしい情報ももらっています。地元の人たちがこの建物のつくり方を学んで、それが延長線上で生かされている事例ということになります。

(スライド42) 特にクラスルームでございませけれども、Lの形になっています。こちらにプランが出ておりますけれども、非常に小さな講堂、アンピシアターがあります。このアンピシアターを、ティーチングと、そしてインフォーマルな集い、集会のために使ってございませ、ここではストーリー・トリムという重要なファクターを見ることができると思います。

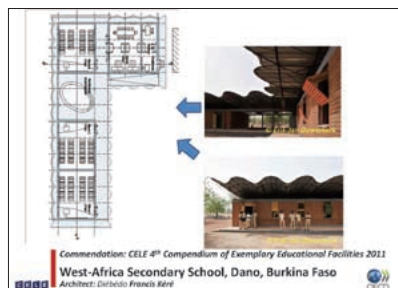
(スライド43) この形状ですが、この屋根の形は、特に空気の流れを意識した屋根の形状になってい



スライド40



スライド41



スライド42

ます。このファブリックを使ったシーリングを通して、外の空気が自由に流れてきます。地元の人材を使ったということ、そしてデザイン的にも非常にこれは聡明なデザインであると私どもは評価させていただきました。

今回のこのプロジェクトというのは、多くの意味において持続可能な学習環境の事例であると思います。必ずしもいつもハイテクを駆使するということが必要でないということが、今回のこのケースではよくわかりいただけるのではないかと思います。もちろん目に見えないところでかなりのテクノロジーが使われていると思いますけれども、ノンハイテクノロジーもかなり使われています。

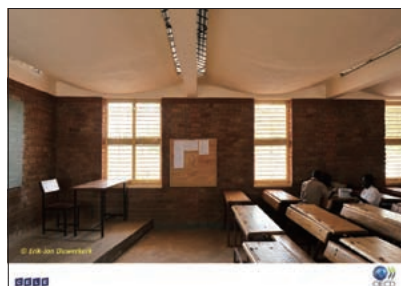
(スライド44) さて、最後になりましたが、「ふじようちえん」でございます。今回、最もすばらしいケースということで表彰されたわけでございますけれども、この幼稚園が幼児たちに提供している学習環境は非常に効果的であり、そしてまた非常に刺激的である。また、他人に対する思いやりがここにうまく反映されている事例であると私どもは評価させていただきました。子どもたちが実際にこの環境の中でどのような関係を持つことができるのか、この建物そのものが学習のツールというふうに考えることができますと思いますし、また、それぞれの建物がコミュニティとどのように接続されているのか、その素晴らしい事例であると言ってもいいと思います。

(スライド45) 先ほどこのプレゼンテーションがございましたので、皆様方はもう既に詳細に関しては御理解されていると思いますが、何枚か写真を用意してきましたので、実際にここで見ていただければと思います。学生とこの建物がいかにかどのようなインターフェイスを持っているのか、非常にすばらしい事例だと思います。

さて、今回、審査員の間で評価された共通のテーマとして幾つか挙げるができると思います。コミュニティの意識を提供することができる、自分がそこにかかわっているのだ、入っているのだという意識を提供できるかどうか、そしてさまざまな学習の形態をサポートすることができる、さまざまな専門領域のニーズにこたえることができるかどうか、これも重要な基準ではなかったかと思えます。

特にこのプロジェクトがスタートして、設計が始まって、さまざまな関係の人たちのコミュニケーションがあるわけですが、この幼稚園というのはこうしたさまざまな関係者が最初から最後まできちんとコミュニケーションを持ちながら、何が必要とされているのか、そうした関係づくりがあったということが今回の受賞の最も大きな理由ではないかなと私どもは考えています。

先ほど私どものハンナが言うておりましたけれども、学習環境というのは接続性、環境、そして地球



スライド43



スライド44



スライド45



スライド46



スライド47

の意識というものをさらに改善するためのサポートをしなければいけない。いつでもどこでも学習をサポートすることができるということ、より強いパートナーシップを学校のリーダー、学校のコミュニティ、そしてデザイナーの方々と関係を構築することによって成功裏に展開することができるという彼女のコメント、私も全くそのとおりだと思います。

最後になりますが、建築というのは人間そのものであると考えなければいけないと思います。すべては人ありきです。

どうもありがとうございました。(拍手)

司会：

アラスター ブリス様、どうもありがとうございました。

記念講演



海外の学校建築

—長年にわたり海外の学校建築を
視察してきたなかで—

長澤 悟 氏

東洋大学理工学部教授

長澤 悟 氏

東洋大学理工学部建築学科教授。工学博士。教育環境研究所所長。

1948年、神奈川県横須賀市生まれ。

1978年、東京大学大学院博士課程修了、東京大学助手。

1987年から日本大学工学部専任講師。助教授を経て教授。

1999年、東洋大学工学部教授。

1988年から教育環境研究所所長を務める。

専門分野は建築計画(教育施設、地域施設、住宅等)、設計。

特に、教育方法の多様化に対応した学校建築計画、地域施設計画、計画・設計プロセス、住宅・地域づくり等に関する研究を進める一方、学校建築等の計画・設計について、教職員・PTA・住民・子どもたちが参加する計画プロセスをとりながら、新しい学校のあり方を提案している。

主な受賞歴

2010 日本建築学会作品選奨(広島県府中市立府中学園府中小学校・中学校)

2008 日本建築学会作品選奨(福井県坂井市立丸岡南中学校)

2006 日本建築学会作品選奨(山梨県昭和町立押原小学校)

2000 日本建築学会業績賞(福島県三春町の一連の学校計画)

1998 第18回福島県建築文化賞準賞(福島県棚倉町立杜川小学校)

1991 日本建築学会作品賞(長野県浪合村立浪合学校)

司会：

それでは、本日最後の記念講演といたしまして、東洋大学理工学部教授の長澤悟様より「海外の学校建築－長年にわたり海外の学校建築を視察してきたなかで－」と題しまして御講演をいただきます。

プロフィールにつきましてはお手元の資料を御覧ください。

それでは長澤先生、よろしくお願いいたします。

長澤 悟氏：

(スライド1) 長澤でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

私に与えられたタイトルは、ごらんいただいているとおり「長年にわたり海外の学校建築を視察してきたなかで」というものでございます。ということは、つまり最新のものだけではないということも意味します。最新の学校の状況については、今、OECDのお二人の先生から御紹介がありましたので、少し長いスパンで、私自身、長く学校建築の研究、あるいは計画に関わってまいりましたが、その中で海外の学校をどうとらえているか、あるいは海外の学校の施設のありようを通じて何を日本の学校の課題として考えているか、そういう観点でお話しさせていただきたいと思えます。

個人的に私が学校建築に関わり出したのは、卒業論文、1971年、昭和46年に、学校の1日をじっくり見るという課題を始めてからですから、ちょうど40年になります。その時期というのは、日本の学校建築というのは、建築に関して言えば、ある意味で標準設計一辺倒と言っても良かった時代であります。

一方で、アメリカのオープンスクールの動向なども情報としてたくさん入ってきたところで、日本の学校もどうも変えられそうだ、あるいは変わらなければいけない、学校建築変革の夜明け前といった時期だったかと思えます。

そのころを思い出すと、同じような学校建築しか国内にない状況の中で、新しい学校建築の可能性、課題を知るには、海外の学校を見るということが、特にアメリカとイギリスの学校建築についての情報というのは大変刺激的だし、参考に、同世代の学校建築に関わったものは同じようにアメリカ、あるいはイギリスの学校を見ていた、あるいは情報を集めていた、勉強していたということがあると思えます。

(スライド2) 海外の事例をどう生かすか、どう見るかということですが、今、申しましたように、当時の状況について言ってみれば、外からの変革といえますか、先ほど申しました、同じような建物しかない中で、当たり前と思っている施設のあり方に対して、その固定観念を破るといえますか、そういう意味では新しい刺激が必要だった。そこで問題点に気づき、課題を発見する、ヒントを得る、あるいは

<p style="text-align: center;">海外の学校建築</p> <p style="text-align: center;">長年にわたり海外の学校建築を視察してきた中で</p> <p style="text-align: center;">2011.1.19</p> <p style="text-align: center;">東洋大学理工学部建築学科 長澤 悟</p>	<p style="text-align: center;">海外の事例をどう生かすか、どう見るか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 外からの変革 ・ 問題点に気づき、課題を発見する ・ ヒントを得る、まねる ・ 我が国の取組を位置づける ・ 同じ目標に対する答の出し方の違い 	<p style="text-align: center;">アメリカ オープン・エデュケーション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1970年代 オープンスクール ・ スプートニクショック (1957) 教育改革 国防費 ・ フレキシブルな教育空間—壁のないオープンスペースの学校 奥行きが深い、安定した教育空間—人工照明・空調 負荷を減らす窓のない学校 オープンスペース・システム家具 量的整備システムズ・ビルディング SCSD SEF RAS ・ Revolutionaryな学校変革 ・ 図書館のような学校
スライド1	スライド2	スライド3

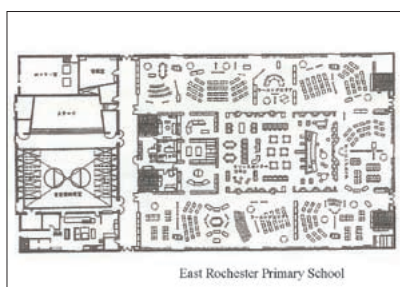
ここに真似ると書いてありますが、新しく課題について考える種を得るということです。それらを日本の学校建築をめぐる条件とあわせて仕立てていくといえますか。次第に外国を見るのは、単に参考にするというだけではなくて、我が国の学校建築計画の取り組みを位置づけるといえますか、それから、海外の学校建築を通じて日本の学校建築のありようを総体的に考える上で役に立つ、そういう形の生かし方になってきているというふうに思います。

それから、海外の学校を見て、もう一つ大事なものは、同じ目標に対する答えの出し方の違いといえますか、例えば、先ほどのお話で、学習の個別化とか、コミュニケーション能力をどう育てるか、いろいろな課題が示されたわけですがけれども、でもその答えの出し方、建築の在り様というのは、やはり、その学校をめぐる、あるいは建築をする上での日本の状況の中で違い得る、あるいは国ごとに違い得るということだと思えます。

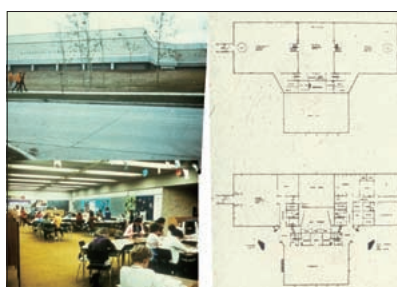
(スライド3) 最初に、例えば今、ここにいろいろなことが書いてありますが、アメリカの学校建築が、オープンスクールがいろいろな刺激となって日本の学校を変わり出したというふうに申しましたけれども、そこでは建築のとらえ方として、フレキシブルな空間とか、あるいは変えることについて、レボリューショナルに変えるとか、あるいは学校の源イメージとして図書館のようなものがある。それによって変革の姿が違うといえますか、これはオープンスクールの最初のころの例ですが、(スライド4) これは一見して図書館のようにも見えます。説明されなければ学校とは見えない。(スライド5) しかも建築だけの図面を見るとこのようになります。教室がない。とにかくフレキシビリティを優先して、多様な教育に対応していこうというのがアメリカの学校の変化のスタートだったわけでありませう。

フレキシブルな空間をつくるためには、奥行きが深い空間が要る。そのためには人工照明、空調が必要になる。そうすると、負荷が少ないほうがいいから窓がないほうがいい、太陽の光が必要だったら外へ出ればいいのではないかと、ある種の非常に割り切り方をベースにして、でも明確なのは、とにかく変えなければいけない、教育を変えていこうという強い意思が一つの姿となってあらわれているということが挙げられます。

(スライド6) 私の海外の学校視察の最初は1976年のことでした。ちょうどアメリカの200年建国祭の年でしたけれども、その時点、まだアメリカの学校はオープンスクールが全盛期でありましたけれども、先ほど見ていただいた図に対して、やはりクラスの間というのは大事だ、あるいは外の光とか風とかというのも感じ取れるようにしたい。それと、その前の時代に開発された、システムズビルディングとい



スライド 4



スライド 5



スライド 6

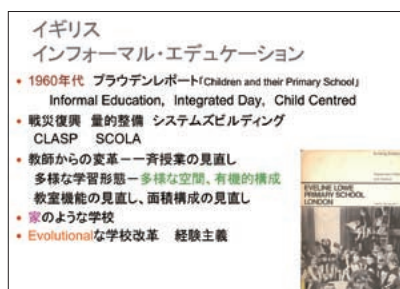
うのは言ってみれば合理的、経済的に目指す質と内容の施設をいかに実現しようとするかという意思のあらわれとしてあったと思いますが、そういうシステムを採用しながら、随分空間の雰囲気は人工的一辺倒な環境から変わってきているわけでございます。

このとき聞いて、今でも新鮮に思い出される言葉が、先ほどお話にもありましたけれども、とにかく学校というのはインスティテューションではない、インスティテューショナルな場から、もっと子どもたちの生活を受け入れる場にしていかなければいけないということでありました。

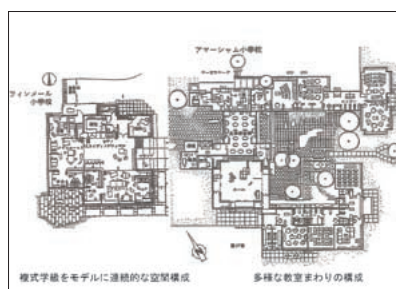
この視察は、当時、10日間で20数校見て回るということで、いかに建築計画の研究者が貪欲であったかというか、あるいはそうでないと研究者になれないということもあわせて、当時教わったような気がします。

(スライド7) 続きまして、学校を変えていく、社会的に変えていく大きな力となったのは、刺激となったのはアメリカの学校でしたけれども、建築計画の研究者がこぞって勉強していたのはイギリスの学校建築でありました。アメリカのオープンエデュケーションに対して、我々はそれをインフォーマル・エデュケーションというふうに呼んでいました。当時、出されたブラウデンレポートというのは、計画の研究者にとっては必須の読み物でしたし、(スライド8)ここに御覧いただいているように、その事例については「ビルディングブルティン」という、今でも継続して出されている冊子にまとめられて、その中に、計画のプロセスは当然のこととして、家具まで入った、非常にその中を歩き回れるような図面がたくさん用意されていて、現場に行かなくてもその中を動き回ってみることでいろいろな想像、イメージを膨らませてくれるようなところがございます。

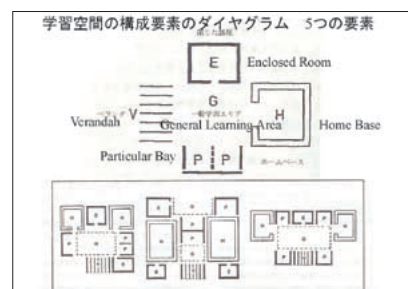
(スライド7) 右下にあるイブリン・ロウ・プライマリー・スクール、これは「ビルディングブルティン」の36号ですけれども、この学校は、当時、教育を変えていかなければいけないという動きに対して、実験校として、それを受けとめる学校建築はどうあったらいいかということの研究してつくられたものであります。(スライド9) そのときには、従来のクラスルーム、四角い教室の果たしていた機能というのを五つに分解する。ホームベース、それから閉じた部屋として、音環境として守られたスペース、それから、様々な活動ができるパティキュラーベイ、それから半屋外、カバードスペースというベランダ、それといろいろな学習が展開できる学習エリア、その五つの性格があって、その組み合わせを学校の教育目標、学校の規模等々に応じて有機的に組み立てて、それで、それぞれ違う学校、目的に合った学校をつくり上げていくのだと。(スライド10)その実験校としてつくられたのがイブリン・ロウ小学校だっ



スライド7



スライド8



スライド9

たわけであります。

これも先ほどのアメリカのオープンスクールとは別な意味で、このプランをぱっと見せられて、これが学校建築だとはなかなか想像がつかない。それをさっきの五つの要素で当てはめてみると、そこに従来の教室が一つの箱として備えていた機能、期待される役割というのを分解して、それを組み合わせて同じ機能を果たす。ですけれども、よりフレキシブルで、あるいは、より多様な活動が自由に展開できるような空間がつけられたわけであります。

(スライド7) それについて、先ほどアメリカの学校ではレボリューショナルと言いましたけれども、イギリスがまずスタートして、経験主義の国として実験をし、検証し、その成果を次にまた反映するという形で変化を遂げていったのに対して、アメリカは一気に変えたということで、さっきのレボリューションとエボリューションがちょうど対になっている。

もう一つ、先ほどアメリカの学校は図書館がアナロジーとしてあると言いました。イギリスの学校は家のような学校、あるいは家庭の延長として子どもの育つ場をとらえるのだと。(スライド11) そういうもとのイメージがある中で出来上がった空間というのは、何枚かの写真を見ていただいてもわかるように、非常にスケール感、あるいは空間の雰囲気、あるいは家具、そういったものが大変家庭的なスケールと雰囲気を備えているわけであります。

(スライド12) ここで見ていただいているのは、先ほどのイブリン・ロウが1965年にできた実験校ですが、これはその成果を受け、さらに新しい課題を受けとめて、その次に1978年だったと思いますが、つくられたギルモント小学校というものです。これは先ほどの五つの要素を組み合わせる教室周りをつくり上げていくというコンセプトを基にしながら、右上にありますように、学校の中ではクラス単位の活動だけではなくて、縦割り、あるいは学年の各クラス一緒、あるいはそれが多様に組み合わせられ、いろいろな集団が編成されている。それに応えるために、あるユニットをつくりながら、ユニット間がまたつながっていったって、様々な空間、あるいは様々な集団での活動が可能な建築をつくり上げていったわけであります。

余談ですが、今、分裂したシーラカンスが学校をそれぞれたくさん作っておりますけれども、昨日、そのうちのお一人の小嶋さんと話していて、スタディしている案をギルモント小学校のようだというふうに言いましたら、実は自分が大事にしているのはギルモント小学校で、それを意識していなかったつもりだけれども、何となく遺伝子としてあったのかな、見破られた思いだというふうに言われましたけ



スライド10



スライド11



スライド12

れども、建築家もやはりこういう空間のありようというのを求めていたということでもあります。

これが視察というよりも海外の学校と日本の研究者、あるいは日本の学校建築のその後の変化のベースとしてどういうふうにとらえられるかということでお話ししたわけでもあります。

(スライド13) ここから実際にこれまで訪ねた学校を事例にしなが、事例の紹介を通じてそれぞれの国でどんな空間づくりがされていて、それが我が国の空間のとらえ方とどういう違いがあったり、あるいはどういう特色があったり、そこから何を学べるかということでお話をしていきたいと思います。

私は35年、先ほど研究を始めたのは40年前、最初にアメリカへ行ったのは35年前と。35年間の話を今から30分弱でしていくので、ちょっと大変ですが、途中でスライドは飛ぶことがあると思いますが、あらかじめお断りしておきたいと思います。

これまで20数カ国、数十校の学校を見ながら、それぞれの国の特色、あるいはそれぞれの国で共通しているながら日本とは違う、そういったことで感じたことをこれからお話ししていきたいと思います。

(スライド14) 最初に見ていただくのはイギリスの学校で、ここでは教室のICT化とか、教育的取り組みの継続とか、木の学校とかということでお話ししたいと思います。

先に教育の継続ということでは、先ほどギルモント小学校を見ていただきました。1978年ですから30年あまり経っておりますが、これを数年前に念願かなって訪れることができました。校長は2代目、最初の校長が2、3年で、その後、引き継いできたので30年近く同じ女性の校長で、その校長のもと、その当時の目指した教育の理念そのままの教育が今でもしっかり定着して行われている。

当時の教育は、チャイルドセンタードとといいますか、子ども中心の教育ということで、その後、イギリスもいろいろな国のカリキュラムとかいろいろな教育改革が進んできていますけれども、その前の時代の子ども中心の教育をきちんと基本に据えながら、しかも今の課題に込えている。意地悪な目で、子ども中心というと、影のほうでちゃんと学習が成立していない、遊んでいる子もいるのではないかといいことで見回しても、1人もいないです。1人もいないのは、一つは学習が共同で行われているからであるというふうに思います。一斉授業ではなくて、それぞれの子どもが活動しています。しかもそれが一人一人ではなくて、みんなで学び合っている。そういう中でお互いが助け合ったり声を掛け合ったりしながら、しかもそれぞれ自分のこれという課題をしている。いずれにしろ、30数年、今日的な課題も受けとめながら一つの学校がきちんと生きているということ自体に大変感銘を受けてまいりました。

ここで見ていただいているのは、そのときに行った別の学校ですが、これはイギリスのハンプシャー

目次	
<ul style="list-style-type: none"> イギリス アメリカ デンマーク スイス オランダ スウェーデン フィンランド 韓国 	<ul style="list-style-type: none"> 教室の構成、機能の充実 家具・インテリア 教員スペース 図書・メディアセンター 本物の活動空間 地域との関わり エコ・木材 職業教育

スライド13

イギリス
<ul style="list-style-type: none"> 教室のICT化 教育的取組の継続 木の学校

スライド14



スライド15

州の学校です。イギリスはPFIで学校建築をするというのが一般化しているわけですが、ハンプシャー州だけはPFIはしない。PFIのVFMは設計的な工夫で自分たちは達成する。それによって自分たちの目指す学校を創るのだということで、ここでは木を使って豊かな環境がつけられておりました。

(スライド15) このときに大変ショックを受けたのは、私たちは今、100年学校、センチュリースクールということで、サステイナブル、あるいは長く大事にされる学校づくりというのをテーマにしているわけですが、話し始めた担当者が、この学校は300年使いますとあっさり言うのです。確かに木を使って大きな屋根をかけて、きちんとした勾配を持った屋根をかけて、しかもレンガでつくってれば、300年と言われてももつだろうと。平屋です。耐震の問題がないということはあるかもしれませんが、その300年学校というのもまた大変刺激的な言葉でありました。

(スライド16) これは2009年、一昨年、たまたま訪れる機会があった竣工間際のロンドン近くの学校です。左の写真の奥のほうにもとの校舎があります。もとの校舎は幼稚園、あるいはほかの機能に転用しながら、新しい小学校の教室を木造で作っております。

(スライド17) その校舎の中は、これは教室ですけども、左上の写真は、日本の学校の教室でいうと、ちょうど教室背面の様子をあらわしたのですが、これが教育の正面であります。質の要素として、ビデオプロジェクターがあり、黒板にかわってそれを映すホワイトボードがあり、実物投影機があり、子どもたちを気持ちよく受けとめるような空間、しかもそれが整った教室にするために、右下のように教室の中はかなりしっかりした収納がとられている。

これはちょっとこの後、各国の学校で、教室というのがきちんとした収納を持って計画されて、子ども目に見える環境というのは極めて学習空間として整っている、その辺の様子はまたこの後見ていただきたいと思います。

これは一つの、こういう形でICT化された教育に対応する教室の設計があるのかということで、ずっと捉える部分と、でも一方で、日本の学校の先生の板書技術というのは世界一だという定評があります。つまり、例えば小学校でいうと、右から書き始めて、途中では一切消さないで、左側で1時間終わったところでぴたっと終わって、それが一つのその日の学ぶことになっている。ただ、黒板の前だけで教えてはいけないということが、先ほどの教室というのはファシリテーターだというお話がありました。でも一方で、そういう日本の学校の先生の持っているすぐれた教育技術を維持していく、継承していくというのもまた大事だとすると、単にこれが新しい姿だということではなくて、それをどういうふう



スライド16



スライド17



スライド18

受けとめていくかということがまた我々に問われる課題だというふうに思います。

(スライド18) それから、外国に学ぶということであると、ちょっと話が飛びますが、防犯というか、子どもの安全ということがあります。イギリスは10歳か11歳ぐらいまで、子どもだけで、大人がいない状態で子どもを外に出すと、学校の中でも先生も罰せられるというようなことがあるというふうに聞きましたけれども、そういう学校で、それではどういう守り方をしているかということ、塀は右上の様な、壊せば壊れるような木の柵ですし、扉はあいています。大事なのはウェルカムということ。左下の様に、その受けとめる空間がエントランスにつくられている。ただし、このすぐ壊れそうな木の柵というのはとても重い意味を持っていて、その中にいるか外にいるかということで、中にいる人は子どもを守る人間でなければいけない、あるいはそうであることを証明しなければいけない。そのためには、右下のようにきちんと名札を書いて、それから、保護者が同じように黄色いパーカーを着て、黄色いパーカーを着た人がたくさんいるという姿で、子どもたちもまた守られているという気持ちを持てる。塀でなく人で守る、あるいは人の意識で守るということ。

(スライド19) 次にアメリカ。

アメリカの学校で、私自身がいろいろもちろん刺激を受けるわけですが、一つのテーマは中学校の問題。中学校というのは、これはウィスコンシン州の学校ですが、中学校、アメリカではセカンダリースクール、その中でジュニアハイスクールというふうに呼ばれておりますけれども、ジュニアハイではなくて、やっぱり人生の中で知的にも体格的にも性的にも社会的にも大きく成長を遂げる、変化をする時期というのを、その年代にふさわしい空間、ふさわしい子どもへの対応、教育で応えていこうということで、それをミドルスクールと呼ぶ、そういう取り組みが大変興味があって出かけたのです。

(スライド20) これがプランで、1階と2階がありますが、ここに1学年、ここに1学年、ここに1学年あります。ちょっと小さい図で見にくくて恐縮ですが、真ん中にコンピュータラボをそれぞれ、その周りに教科ごとの教室が並んでいる。この学年のエリアの中で教科ごとの教室に生徒は出かけて行って、そこで学習をする。コンピュータ、あるいは図書館は共用です。これが中心のコンピュータラボです。各教室は教科ごとに、あるいは教科書ごとにといいより、(スライド21) その教科の先生ごとに環境が整えられて、子どもたちを待ち受ける。子どもたちはその部屋にずっといて、先生がやってくるのを待つというのではなくて、みずからその教室に出かけて行って、その動き自体が能動的に学習に向かう姿勢を育てる、そういう形の学校運営がされております。



スライド19



スライド20



スライド21

(スライド22) これは、またちょっとテーマが違いますが、同じ学校で、これはカフェトリウムといいます。学年ごとにまとまった生活圏がつけられる一方で、学年を超えて様々な発表、コミュニケーション、アートが共有できるように、そのスペースを効率的に使うという意味合いを含めて、緩い何段かの壇状のホールがあって、そこは食事の時間にはカフェテリアになる、そうでないときには学習の場になる。その中心、ステージにあるのは、ここの間仕切りを閉じると独立した音楽室になります。これも必要なスペース、活動の場を確保する、でも一方で面積とかいろいろな条件に合った形でそれを実現しようとする努力がここに見られます。

(スライド23) アメリカの学校を見に行くと、やはり刺激を受けるのは特別教室です。特別教室は、先生がそこにいて、その環境をつくる。様々な活動に応えられる十分な設備、環境がある。我々は理科室、美術室、同じような教室は持っていますが、何となくワンパターン、理科室はこんなもの、音楽室はこんなものと思込んではいないか。その思い込みを払ったところに、もっと豊かな子ども自身が活動する場、あるいは場面が思い浮かぶということだと思います。

(スライド24) アメリカの学校の大きな特徴は、もう一つは図書館。図書館こそ学校の中心である。これは最初に申し上げた、学校というのは図書館であるという概念とつながるわけです。学校の中心に広大なスペースを持って、図書館、あるいはコンピュータが置かれている。それは単に施設だけではなくて、人的な対応がされているというのがまた大きな特色で、ここは後ろに司書のスペースがあり、カウンターがあり、司書がライブラリアンではなくてメディアスペシャリスト、図書館だけをやるだけではなくて、各教科の先生方と連携しながら、学校の様々な教育活動を支えるエンジンとして図書館をきちんと機能させている。

(スライド25) 写真がいろいろ飛びますが、これは体育施設。アメリカの学校の非常にため息が出るのは、特に中高等学校の体育施設であります。これは、ボルダリングといいますか、こういうちょっとチャレンジするような場所も、日本の学校でも1回どこかで実現したいなと思っているところです。

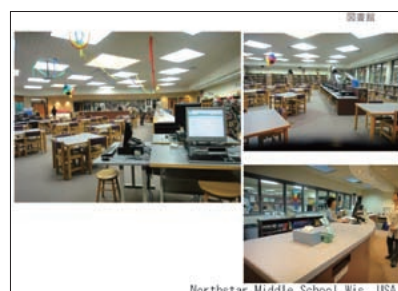
(スライド26) それから、いろいろ日本と学校の文化が違う、学校の環境が違うので、刺激を受けることは多いわけですが、これは日本で言えば用務員室です。カストディアン、学校に3人、維持管理の専門家がいて、非常に広い、4、5教室あるような作業スペースがあります。ここで学校の維持管理は全般的に行う。あるいは年度が変わるときには学校全体を塗りかえとか、そのくらいのことをしています。



スライド22



スライド23



スライド24

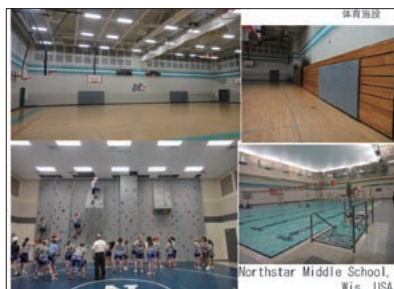
サステイナブル、長く使い続けるといっても、ただ丈夫につくればよいというのではなくて、常にそういう維持管理が伴ってのことですし、そのための条件をどう作っていくかというあたりも大いに参考になるところだと思います。

(スライド27) それから、個別学習、子どもの学習の場面を支えるのは、何と言っても先生との関係のスペースです。このスペースは教材の製作、あるいは管理する部屋。日本でいうと印刷室ということでも簡単に片づけられますけれども、そこに様々な機械があり、道具があり、開発された教材がきちんと管理されて、次の年度もそれをもとにしながら、さらに教材ステップアップするという、そういう仕組みがあるということです。

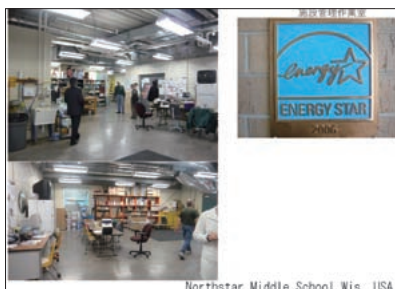
(スライド29) これは小学校の例です。

(スライド30) それから、先ほどイギリスの安全ということでは言いました。先ほどのイギリスの学校も2002年、これも2002年。アメリカの、これは塀で守るといって、ゲーティッドコミュニティといいますが、警察官もいる。ただ、警察官も怖い顔をしているのではなくて、やはり安全を守る、あるいは安全教育をするという意味で、子どもたちに教える、あるいは守る大人としての役割を果たしているということが大事になります。こういう塀がありますけれども、でも塀と金属探知器では子どもの安全は守れないというのがそのとき聞いた言葉で印象に残っているものであります。(スライド31) 内部にいる人がどういう人であるかということもきちんと管理する、そのためには受付があり、ここで保護者の人が受け付けていますが、保護者であって顔がわかっても、名札なしに学校にいたことが見つかったら、1回目でイエロカード、2回それをしたら、あとしばらくは学校に来てはいけないという、そのくらい厳しいルールをつくりながら、人で守るといってまた一応している。

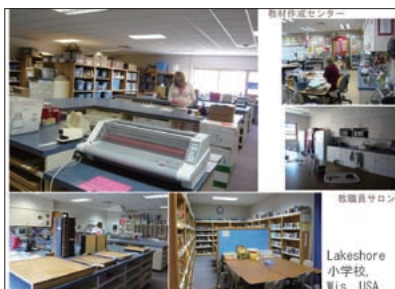
これは一方で学校を支える人たちの言ってみればメンバーズカードのようなもので、ここで受付の人



スライド25



スライド26



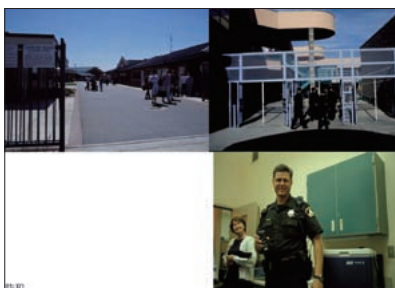
スライド27



スライド28



スライド29



スライド30

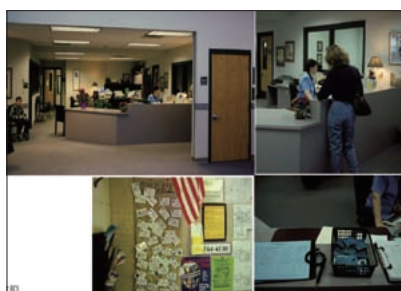
と挨拶をしながら、自分のカードをとって胸につけて校内の中に入って行くというわけです。

(スライド32) ここからまたヨーロッパに戻ります。

この辺は各国で典型的なというより、こういう学校もあったということの話ですけれども、これはデンマークの、発音が難しいのですが、英語読みするとエラップということでしょうか、コペンハーゲンの郊外にある最新の学校で、これは先ほど OECD の方のお話の中で、オープンスクールはある時期失敗したけれども、でもその概念というのは、今、新たに再評価され、それを生かしながら新しい学校をどう創っていくかというのが課題だというお話がありましたけれども、これはそういう学校の一つの例ということがいえるかと思えます。

(スライド33) プランはオープンプランで、その中に教師のステーションがあり、建築の図面で見ると教室空間はなくなっています。学校の中心に大きなアトリウムの大階段があります。これは私も大きな、みんなが集まれる大階段が好きで、今までに何校か作っていますけれども、デンマークにもあったというようなことで、大変おもしろく見ましたけれども、(スライド34) この空間、これが学習空間です。70年代のアメリカのオープンスクールと同じような空間ですけれども、この中にこういう筒状のアルコーブがあって、それが緩い間仕切りになっています。そのアルコーブの中をのぞくと、先生を中心に子どもたちが一緒に集まって、小さな声で非常に密度の高いやりとりをしている、そういう時間、場面を用意できる場と、学習のスペースとしては自由度の高い空間、そういう学校づくりがまた改めて見直されているというところがあると思えます。

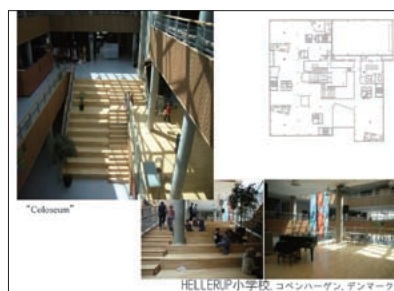
(スライド35) これはその学校の先生の場所。この後、何度も出てきますけれども、ヨーロッパの学校、アメリカの学校もそうですが、日本のような中央職員室というのはいない。そのかわり中央にあるのは、こういう非常にリラックスできるようなスペースと、それから、先ほどアメリカの学校で見ていただい



スライド31



スライド32



スライド33



スライド34



スライド35



スライド36

たような教材を作成、管理するスペース。ここで先生同士のコミュニケーションがある。これはリフレクシブスペースであるとともに、コミュニケーションのスペース。そのコミュニケーションがあつて学校というのが組織体として一つの教育目標に向かって動けるようになっていくということです。その一方で、子どもたちが常に視野に入るような位置にステーションがあつて、そこがメインの執務のスペースになります。

(スライド36) さて、スイスであります。

いろいろな捉え方ができますが、これは一つの学校の姿ということで、日本でも今、過疎化が進んで、統合やむなくというような動きが出ていますが、この見ていただく学校は、1年生から6年生まで、児童数18人、常勤の先生1人、そこに非常勤の先生が4、5人ついて、小規模校として維持されているというか、期待されている。つまりここでは、統合というのはとても考えられないといえますか、つまり学校というのは何かということにさかのぼって、学校というのは地域の中で生き、地域を支えていく、そういう力をつけていく場である。それは、よその場では学ぶことのできないものだ。そこの教育には大人も関わってくるということでもあります。(スライド37) そういう学校は、地域の素材と地域の伝統的な技術でつくられ、地域の過酷な風土にもまた耐えられるような建築になっている。

(スライド38) その教室ですけれども、これは小規模な学校の話とは離れますが、スイスの学校の教室というのは非常にまた整っています。環境を整える、秩序整然としているという意味では、多分、世界中の学校でスイスの学校が一番ではないかと思うのです。18人学ぶ教室がつけられている。(スライド39-40) 中に入っているものもきちんと整っているということをちょっと見ていただければ。

(スライド41) そういう地域の学校は、地域の中での役割もある。これは玄関ホールを入ったところ



スライド37



スライド38



スライド39



スライド40



スライド41



スライド42

あるときには地域の人の集まりの場にもなるというわけです。実はこの学校は日曜日に出かけて、そんなときに見られるのかと思ったのですが、地域の人たちが来てカギをあけてくれるといいますか、まさに地域の人がつくり、地域の人が管理し、地域を支える子どもを育てる場として学校があるということです。

ちょっと飛ばします。

(スライド43) 一方で、これはチューリッヒの近郊の学校で、(スライド44) 建築家の手による最新の学校の一つです。(スライド45・46) ここでは教室があり、その教室のわきに小さなコーナーがつくられているといいますか、教室というのは四角い箱ではなくて、多様なグループ、多様な子どもへの対応ができる空間として捉れているということでもあります。

(スライド47) この学校の中央の職員室、日本でいえば職員室ですが、先生のラウンジ。

(スライド48) この学校は、今、新しい建物を見ていただきましたけれども、旧校舎がありまして、そちらのほうは古い。ただし、黒板、あるいは教材棚、そういったものは同じように豊かに作られている。

(スライド50) オランダに飛びます。

オランダは、学校選択制、ある学校はモンテッソーリ、ある学校は伝統的、ある学校はオープン、それを親が選べるというような独特の学校のシステムを持っています。

(スライド51) その中で、御覧いただくのは、建築家がかなりデザインをして学校をつくっているということ。ですから、(スライド52・53) いろいろな空間が用意され、(スライド54) かつこれは職業教育の場で、これは技術学校ですけれども、ベンチャー企業を建てるプログラムを展開しているところで、非常に余裕のある空間の中でフレキシブルな空間がつくられています。



スライド43



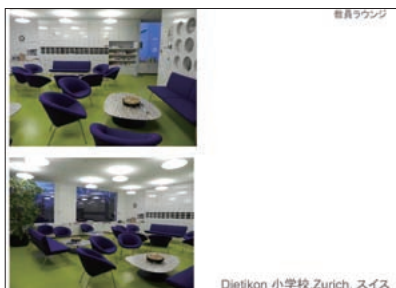
スライド44



スライド45



スライド46



スライド47



スライド48



スライド49



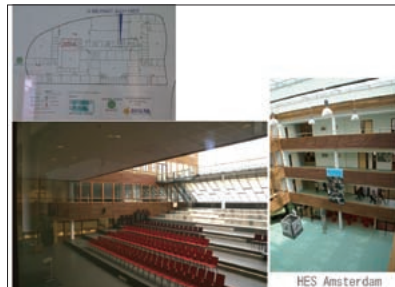
スライド50



スライド51



スライド52



スライド53



スライド54

(スライド55-57) 同じように技術を教える学校ということで、これはかつまたヨーロッパの学校は多国籍化しているということに対して、国で生きていく基本的な技術を教える、そういう役割も担っています。

(スライド58) スウェーデンでは、ゴートランドという、バルト海に浮かぶ11、12世紀につくられた島の学校を御紹介します。バルト海のある中心にあるということ、当時の防衛の要衝であるということ、大きな砦に囲まれた島ですけれども、その島はまたゼロエミッションの島ということで、(スライド59) 風力発電が行われて、石油資源を一切使わないでまちの生活が送れるようになっている。

(スライド60) その学校でご覧いただきたいのは、これはグリーンルームといいますか、地球環境の循環を学ぶ場所として、各教室にこういうサンルームのような場所がつくられていて、そこで緑、あるいは水、あるいは生態系が教室の身近で学べるような、(スライド61) 要するにその島、ゼロエミッションの島で育つ理解と行動ができる子どもを育てるベースとして学校が役割を果たしている。

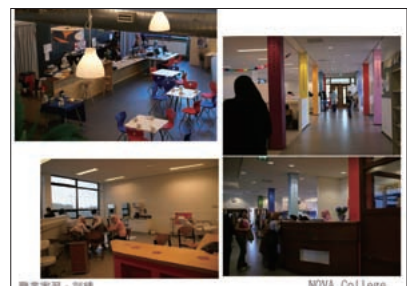
(スライド62) ここからフィンランドの学校をまとめて見ていただきます。



スライド55



スライド56



スライド57

フィンランドはOECDのPISAの成績で俄然注目され、実際、施設についても非常に意欲的に今整備をしています。木造の学校、それから各種の空間のつくり方、さまざま参考になるところがあるわけですが、これは透明な間仕切り。手前にオープンスペースがあって、視野に全部子どもたちの様子が入る形で学校空間をつくっていく。

(スライド63) これは小学校と養護学校の併設した学校です。(スライド64) つまり学校の形態自体も、地域の中でどういう役割を果たすか、その中でいろいろな組み合わせが行われているわけであります。

(スライド67) 図書館。

(スライド68) これは調理教室。

(スライド69) この学校の中心にあるのはこういうスペースで、この学校ではこのスペースを私たちのリビングルームだというふうに呼んでいる。ここでちょっとリラックスできる、あるいはリラックスした状態で相談ができる。向こうのほうでちょっとしたミーティングができて、機械を使う等のちゃんとした話は、ミーティングはここでできる。このロッカーの向こうには先生用のコンピュータの部屋がある。その一画にはキッチンがあって、計器が先生方がやってくるのを待ち構えているというわけです。



スライド58



スライド59



スライド60



スライド61



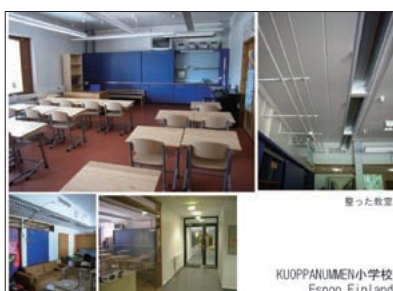
スライド62



スライド63



スライド64



スライド65



スライド66

(スライド72) これは中学校で、要するに教室で生徒の生活、日本の学校の教室というのは教室の後ろにロッカーがあるというのは当たり前になっていますが、生活の要素と教室空間とははっきり分けるというのが欧米の基本的なコンセプトです。教室があり、教室の外側にロッカースペースがあり、その間にコモンスペースがあるというわけです。

(スライド73-74) これは高校例ですけれども、この学校のテーマはアートであります。学校の中にもいろいろなところに現代アートが散りばめられて、そういう雰囲気の中で子どもたちが生活を送れるような、そういう学校づくりが行われています。

(スライド76) それから設備的には、これは配管ですが、配管は天井からとって、フレキシブルパイプで自立のポールが自由に動かせる、あるいは設備的な配管は床からではなくて全部壁からで、これも自由に取り替えられる。

先ほど人が関わって長持ちする学校と言いましたけれども、これは設備、技術的なことが対応して、また、そのフレキシビリティを確保しようとしているということでもあります。

(スライド79) それから、各学校には必ずこういうオーデトリウムがある。これは地域の人の集ま



スライド67



スライド68



スライド69



スライド70



スライド71



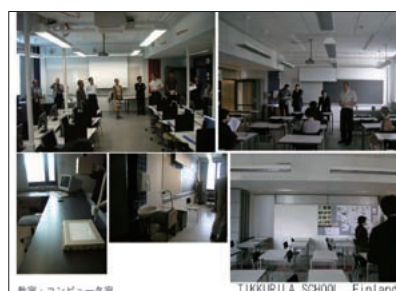
スライド72



スライド73



スライド74



スライド75

りの場になると同時に、さまざまな発表、あるいはまたコミュニケーションの能力を育てる場ともなっているわけであります。

この辺は同じ説明です。

(スライド86) 音楽室。

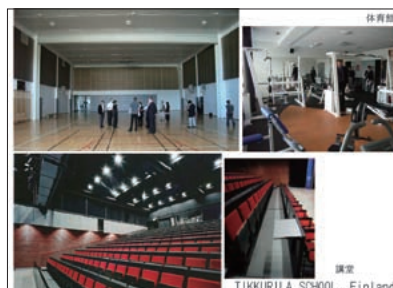
(スライド87) これは被服教室、(スライド88) これは家庭科教室。つまり特別教室として学校用につくるのではなくて、本物の空間としてつくるわけです。



スライド76



スライド77



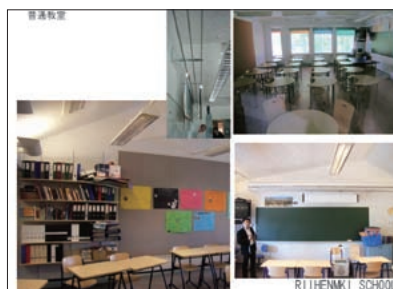
スライド78



スライド79



スライド80



スライド81



スライド82



スライド83



スライド84



スライド85



スライド86



スライド87

(スライド90-91) それから、木の学校づくりというのはフィンランドでは当然のように一つのテーマになっている。

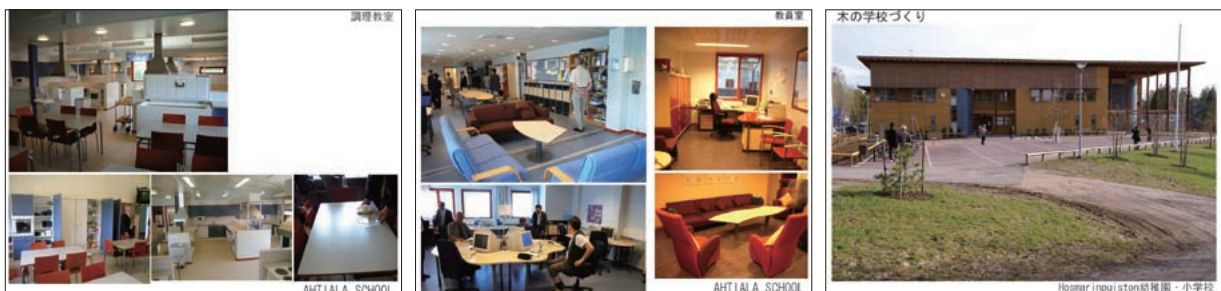
(スライド92) この学校は幼小一環といいますか、赤い部分が小学校、これが共用の部分で、奥に幼稚園があると。(スライド93-94) これも地域が子どもを育てる、その拠点としての学校の姿ということから、こういう形が見られるわけです。

(スライド95) それから、フィンランドの教育、成績がいい一つの理由は、とにかくまだ理解に達していない子どもは置いておかない。その取り出し教育の場が用意され、(スライド96) それから、個別に対応するような場がいろいろ用意されているわけです。

(スライド97) 職員室については共通に……。

(スライド98) 最後に韓国の例をちょっと御紹介したいと思います。

韓国は、言ってみればちょっとアメリカ的なところがあるといいますか、それは何かというと、何か新しい動きがある、あるいは新しいアイデアがあるのだったら、まずやってみようというか、そのためには体制もつくり直し、費用も思い切っかけて、それで一気に変えようとする。行き過ぎたら戻れば



スライド88

スライド89

スライド90



スライド91

スライド92

スライド93



スライド94

スライド95

スライド96

いい。ですけれども、元のところには戻らない。元のところに戻らない。元のところと、あるところにとまった、その差分が最終的な進歩になるということです。

中学校については600の中・高等学校を一気に教科教室型に変える。それから、すべての教室のすべてでICT化を進めるということで、かなり大きな額をかけて、それから専用の局を文部省の中につくって取り組んでおります。

(スライド100) それに伴って、教員のスペースも各教室に先生のコーナーをつくる。これは独特のやり方といえるかもしれません。これが先生のコーナーです。そのかわり中央の教務室は別の位置づけのもとにつくり直す。

(スライド101) 600校というのは、つまり既存の学校を変えるということがありますから、既存の学校を教科教室型にどう変えるか。それは廊下を教科のメディアスペースにする。それから、教室の中に、これはブラインドに教材がプリントしてあるのです。時々、取り替えるのだということですけれども、必要なときには引き下ろすと中身が出てくるということです。同時に生徒のラウンジスペースをつくっているというわけです。

以上、駆け足でござんいただきましたけれども、外国の学校を見ると、改めて学校とは何か。国や地域を支える人材を育てるとか、地域の中での大人も含めた生きがいづくり、あるいは地域の文化とか生き方を伝える場、あるいはさらに大きく言えば、地球の中で生きるマナーとか知識を学ぶ場、様々な捉え方ができると思います。

施設についても、今まで御覧いただいたように、同じ課題に対して社会のありよう、国の文化等によって違いがあるわけですが、最後、施設について一言まとめさせていただければ、施設を考えるとときに、やっぱり一つの問いは、なぜ学校へ行くか、なぜ学校で学ぶのかということがあると思います。



スライド97



スライド98



スライド99



スライド100



スライド101



スライド102

そのために施設はどうあったらいいか。より効果的に教育できるように、より豊かに生活でき、様々な体験ができるように、それと同時に、より幅広いコミュニケーション、人と共同しながらお互いを認め合い、学び合い、自分とは違う他がいて、その中で自分も生きている、そういうことを学ぶ場としての役割というのが究極的に学校にはあるのだろうと。その可能性を広げる上で、空間、施設というのは非常に大きく関わっているし、空間、施設が変わることで新しい教育を生み出す、新しい教育の課題を育てていくような力もあるのではないかと。それを国内だけで考えているだけではなくて、さらに幅広いいろいろな解決の仕方があるのだということ、それを学ぶということが海外の学校を参照することだということふうに思っております。

ちょっと時間をオーバーしましたが、以上で終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

司会：

長澤先生、どうもありがとうございました。

御講演いただいた先生方、大変どうもありがとうございました。どうぞ会場の皆様から改めて盛大な拍手をお願いいたします。(拍手)

では最後に、国立教育政策研究所文教施設研究センター長、新保幸一より閉会の挨拶を申し上げます。

IV. 閉会の挨拶

閉会の挨拶

新 保 幸 一 国立教育政策研究所文教施設研究センター長

本日の記念講演会の閉会に当たり、ご挨拶とお礼を申し上げます。

昨年、2010年は、我々、学校建築に関わる者にとって大変いい年でした。それはもちろん OECD のプロジェクトで「ふじようちえん」が極めて高い評価をいただいた、これに理由があります。この決定は、昨年の10月、パリの OECD 本部で開催された CELE の運営委員会において、出席者の総意で承認されました。私もその会場にいましたが、世界各国の学校建築の専門家の先生方が日本の学校建築を高く評価する発言をされており、大変嬉しい思いをしたことを覚えております。

審査委員長をお務めになったロドルフォ・アルメイダさん、以前、ユネスコで学校建築に関する要職をお務めになった方ですが、そのアルメイダさんも「ふじようちえん」の優れた設計思想、それから、それを実際に実現した高い設計能力を非常に称賛していらっしゃいました。

これから出来る事例集には、ヨーロッパ、北米、南米、アジア、オセアニア、それからアフリカ、世界各国の学校建築が掲載される予定です。どれも高い機能、それから明確な個性を持った素晴らしい学校建築ばかりです。

こういうのを見ますと、国によって教育の制度とか、あるいは行政の仕組みというのが非常に様々ではありますが、未来を担う子どもたちにより良い環境で学んでもらいたいという大人たちの気持ちというのは世界のどこでも同じなのだということがよくわかります。

建築に関係する者としては、世界の各地でより良い学校建築をつくるために大勢の方が努力していらっしゃるということも、このプロジェクトを通じて改めて感じた次第です。

我々、国立教育政策研究所では、これからも様々な機会を活用しまして、海外の学校建築に関する情報を皆様にお伝えする活動を続けていこうと思っています。

また、これとは反対に、日本の学校建築に関する情報を海外の関係者に発信する、その活動も続けていこうと考えております。

今後も、当研究所の活動に御注目くださるようお願いしたいと思います。

最後になりました。今日の講演のためにパリから来ていただいたハンナさん、アラスターさん、手塚貴晴先生、手塚由比先生、東洋大学長澤先生、講師の皆様、大変ありがとうございました。

それから、実はこの会の運営にいろいろな方にお世話になっております。とても全部は言っていられないので、まとめてここでありがとうございました。

それから、何よりもまして、お忙しい中、大勢の皆様にお集まりいただきました。今日、会場に来ていただきました参加者の皆様に心よりの感謝を述べまして、私の閉会の挨拶といたします。どうもありがとうございました。(拍手)

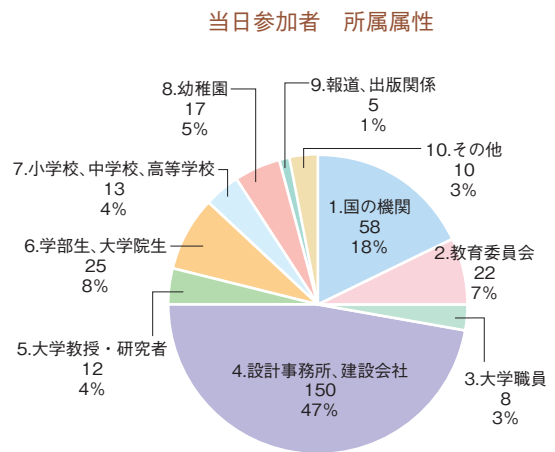
参考データ

参加者

事前登録者数：392 当日参加者数：320 当日参加率：82%

当日参加者 所属属性

	人数	割合
1. 国の機関	58	18
2. 教育委員会	22	7
3. 大学職員	8	3
4. 設計事務所、建設会社	150	47
5. 大学教授・研究者	12	4
6. 学部生、大学院生	25	8
7. 小学校、中学校、高等学校	13	4
8. 幼稚園	17	5
9. 報道、出版関係	5	1
10. その他	10	3
計	320	100

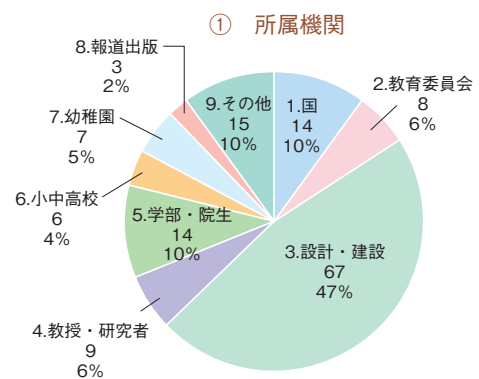


アンケート結果

参加者数：320 アンケート回答者数：143 回収率 45%

① あなたの所属する機関の該当番号に○印を付けて下さい。

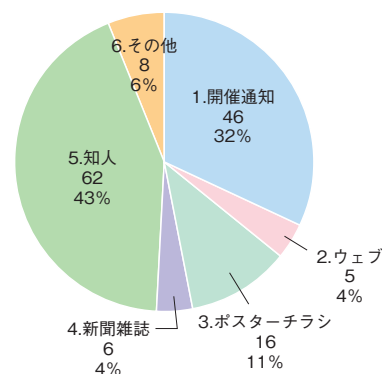
	人数	割合
1. 国の機関	14	10
2. 教育委員会	8	6
3. 設計事務所、建設会社	67	47
4. 大学教授・研究者	9	6
5. 学部生、大学院生	14	10
6. 小学校、中学校、高等学校	6	4
7. 幼稚園	7	5
8. 報道、出版関係	3	2
9. その他	15	10
(民間企業・メーカー・市役所・情報設備・学校職員・財団・小中高大総合学園事務)		
計	143	100



②-1 今回の講演会を何でお知りになりましたか？

	人数	割合
1. 研究所の開催通知	46	32
2. 研究所のウェブサイト	5	4
3. ポスター・チラシ	16	11
4. 新聞、雑誌	6	4
5. 知人からの連絡	62	43
6. その他 (先生・学園理事長・子ども環境学会・県庁メール・事務連絡・教育委員会)	8	6
計	143	100

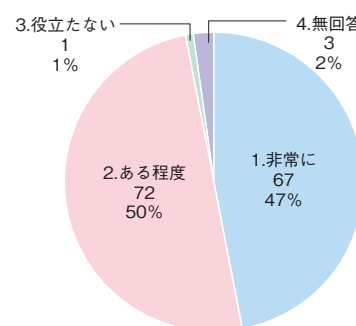
②-1 何で知ったか



②-2 今回の講演会は、あなたにとってどの程度役に立ちましたか？

	人数	割合
1. 非常に役立った	67	47
2. ある程度は役に立った	72	50
3. あまり役に立たなかった	1	1
4. 無回答	3	2
計	143	100

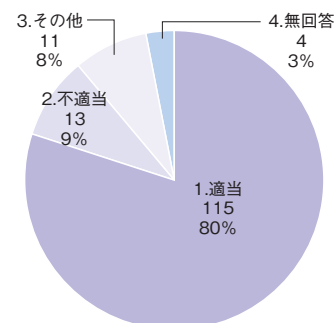
②-2 役立ち度



②-3 1月という開催時期についてどう思いますか？

	人数	割合
1. 適当である	115	80
2. 適当でない (いつでも・2月・3月・4月・4月以降・5月 3・6月・8月 2・8～10月 ・12月以外・なぜ1月なのか)	13	9
3. その他	11	8
4. 無回答	4	3
計	143	100

②-3 開催時期として1月は



その他のコメント

- ・いつでも
- ・年度末以外
- ・2、3月学生が参加できる
- ・春か秋コート不要な季節

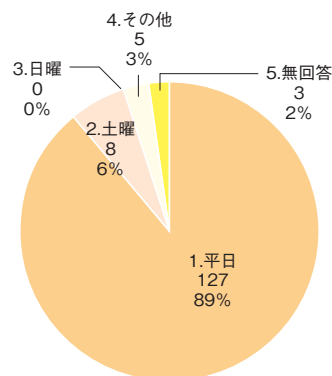
②-4 水曜日の開催についてどう思いますか？

	人数	割合
1. 平日(月～金)がよい	127	89
2. 土曜日がよい	8	6
3. 日曜日がよい	0	0
4. その他	5	3
5. 無回答	3	2
計	143	100

その他のコメント

- ・いつでもよい
- ・金がよい
- (遠方でも土日ゆとりを持って帰れる)

②-4 曜日の希望



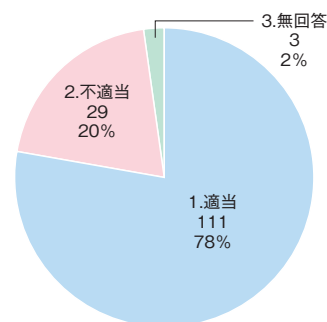
②-5 今回の会場についてどう思いますか？

	人数	割合
1. 適当である	111	78
2. 適当でない	29	20
3. 無回答	3	2
計	143	100

適当でない理由のコメント

- ・聞こえにくい
- ・イスが硬い
- ・スクリーンが見にくい
- ・机がほしい
- ・出入口の場所がよくない
- ・トイレが遠い
- ・学校施設で行うのがよい

②-5 実施会場

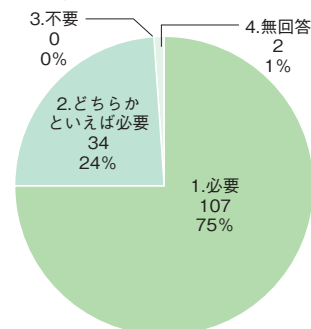


③ このような講演会を今後も開催していくことは必要だと思いますか？

	人数	割合
1. 必要(回/年)	107	75
2. どちらかという必要(回/年)	34	24
3. 不要	0	0
4. 無回答	2	1
計	143	100

必要回数	1. 必要	2. どちらかという必要
1回/年	23	14
2回	28	9
1~2回	16	-
3回	10	2
4回	8	2
5回以上	3	-
回数記入なし	19	7
計	107	34

③ 講演会の開催希望



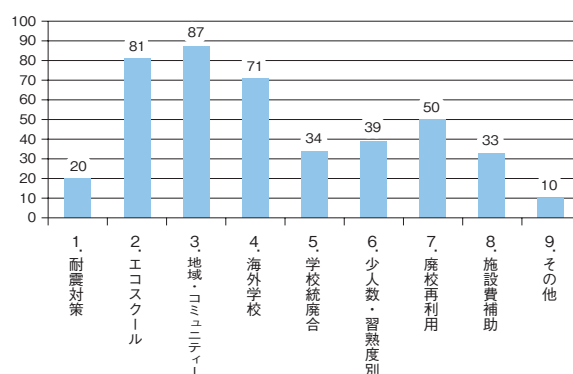
④ 学校施設について、あなたが興味・関心をお持ちのテーマは何ですか？（複数回答可）

	人数	割合
1. 耐震対策	20	14
2. エコスクール	81	57
3. 地域連携、コミュニティスクール	87	61
4. 海外の学校建築	71	50
5. 学校統廃合	34	24
6. 少人数対応、習熟度別対応	39	27
7. 廃校施設の再利用	50	35
8. 施設費補助制度	33	23
9. その他	10	7
計	425	— (平均選択数3)

その他のコメント

- ・ 幼児施設、幼稚園(認定)こども園
- ・ 学校図書館
- ・ 施設維持管理
- ・ 国産材利用
- ・ 知の創造を生み出す「物」づくり
- ・ 教育空間と学力向上の関係
- ・ 空間の質向上
- ・ 教育効果

④ 関心テーマ(複数回答)



⑤ 今回の講演会に関するご意見やお気づきの点がありましたらご記入ください。（自由記述）

- 時間配分が悪い(ひとりひとりが長い他)
- 声が小さく聞こえにくい
- 質疑応答の時間をとってほしい
- もっと国内外の事例紹介を聞きたい
- 椅子がかたい
- 時間が短い
- 休憩時間がほしい
- スクリーンが見にくい

「海外の学校建築 – 国際的動向と先進事例の紹介 –」参加者アンケート

このアンケートは、今後の講演会について検討する際の参考とするためにお願いするものです。必要事項をご記入のうえ、講演会終了時に会場出入口横に設置した回収箱へ投入して下さい。

① あなたの所属する機関の該当番号に○印を付けて下さい。

- | | | |
|-------------|-------------|-----------------|
| 1. 国の機関 | 2. 教育委員会 | 3. 設計事務所、建設会社 |
| 4. 大学教授・研究者 | 5. 学部生、大学院生 | 6. 小学校、中学校、高等学校 |
| 7. 幼稚園 | 8. 報道、出版関係 | 9. その他（ ） |

② 今回の講演会について、下記の中から該当する番号に○印を付けて下さい。

1) 今回の講演会を何でお知りになりましたか？

- | | | |
|-------------|---------------|-------------|
| 1. 研究所の開催通知 | 2. 研究所のウェブサイト | 3. ポスター・チラシ |
| 4. 新聞、雑誌 | 5. 知人からの連絡 | 6. その他（ ） |

2) 今回の講演会は、あなたにとってどの程度役に立ちましたか？

- | | | |
|------------|--------------|---------------|
| 1. 非常に役立った | 2. ある程度は役立った | 3. あまり役立たなかった |
|------------|--------------|---------------|

3) 1月という開催時期についてどう思いますか？

- | | | |
|-----------|------------------|-----------|
| 1. 適当である。 | 2. 適当でない→（ 月がよい） | 3. その他（ ） |
|-----------|------------------|-----------|

4) 水曜日の開催についてどう思いますか？

- | | | | |
|---------------|-----------|-----------|--------|
| 1. 平日（月～金）がよい | 2. 土曜日がよい | 3. 日曜日がよい | 4. その他 |
|---------------|-----------|-----------|--------|

5) 今回の会場についてどう思いますか？

- | | | |
|----------|--------------------|-----------|
| 1. 適当である | 2. 適当でない→（どんな点ですか） | 3. その他（ ） |
|----------|--------------------|-----------|

③ このような講演会を今後も開催していくことは必要だと思いますか？

- | | | |
|-------------|--------------------|-------|
| 1. 必要（ 回/年） | 2. どちらかという必要（ 回/年） | 3. 不要 |
|-------------|--------------------|-------|

④ 学校施設について、あなたが興味・関心をお持ちのテーマは何ですか？（複数回答可）

- | | | |
|-------------|------------|---------------------|
| 1. 耐震対策 | 2. エコスクール | 3. 地域連携、コミュニティ・スクール |
| 4. 海外の学校建築 | 5. 学校統廃合 | 6. 少人数対応、習熟度別対応 |
| 7. 廃校施設の再利用 | 8. 施設費補助制度 | 9. その他（ ） |

⑤ 今回の講演会に関するご意見やお気づきの点がありましたらご記入ください。（自由記述）

記入欄：

**OECD/CELE 学校施設好事例集(第4版)表彰式及び記念講演会
海外の学校建築－国際的動向と先進事例の紹介－ 報告書**

発行年月 平成23年3月

発行者 国立教育政策研究所

〒100-8951 東京都千代田区霞が関3丁目2番2号

Copyright 2010 by the National Institute for Educational Policy Research (NIER)

All right reserved